

「ツロからカイザリヤへ」

使徒 21 : 7~14

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①前回の最後の聖句 (使 21 : 5~6)

Act 21:5 しかし、滞在の日数が尽きると、私たちはそこを出て、旅を続けることにした。彼らはみな、妻や子どももいっしょに、町はずれまで私たちを送って来た。そして、ともに海岸にひざまずいて祈ってから、私たちは互いに別れを告げた。

Act 21:6 それから私たちは船に乗り込み、彼らは家へ帰って行った。

②パウロは、エルサレムに行こうとしている。

③パウロは、ツロからカイザリヤに移動する。

④パウロは、各地の教会から歓迎された。

* トロアスでの 1 週間 (使 20 : 7~12)

* ツロでの 1 週間 (使 21 : 4~6)

* トレマイでの 1 日 (使 21 : 7)

* カイザリヤでの数日 (使 21 : 8~14)

(2) アウトライン

①ツロからトレマイへ (7 節)

②トレマイからカイザリヤへ (8 節)

③アガボの預言 (9~14 節)

結論 :

1. パウロの最終目標
2. パウロのゲツセマネ
3. パウロの評価

エルサレムへの旅から霊的教訓を学ぶ。

I. ツロからトレマイへ (7 節)

1. 7 節 a

Act 21:7a 私たちはツロからの航海を終えて、トレマイに着いた。

(1) ツロからトレマイまでは、南に約 40 キロの船旅である。

①トレマイ (プトレマイオス) は、ローマの植民都市であった。

②旧約時代は、アコと呼ばれた(士1:31)。

Jdg 1:31 アシエルはアコの住民や、シドンの住民や、またマハレブ、アクジブ、ヘルバ、アフЕК、レホブの住民を追い払わなかった。

③現在は、アッコ(ヘブル語)と呼ばれている。

*フェニキヤ最南端の港湾都市で、かつては、東地中海交易の拠点であった。

*イスラエル独立後もパレスチナ人が多く定住している(人口の約3分の1)。

*旧市街は、2001年にユネスコの世界遺産に登録された。

*オスマン帝国時代の各種建築物と、地下に十字軍時代の遺構が残っている。

*主イエスがアッコを訪問したという記録はない。

(2) ここでの滞在は、1日で終わった。

①船荷の積み卸しにさほどの時間がかからなかった。

2. 7 節 b

Act 21:7b その兄弟たちにあいさつをして、彼らのところに一日滞在した。

(1) パウロとその一行は、トレマイでも信者を探した。

①この町の教会も、ツロの教会と同じように迫害の結果誕生したと思われる。

②使 11:19 (ステパノの殉教に伴って起こった迫害)

③信者を探す目的は、2つある。

*主にある交わり

*安心できる宿舎の確保

II. トレマイからカイザリヤへ (8~9 節)

1. 8 節

Act 21:8 翌日そこを立って、カイザリヤに着き、あの七人のひとりである伝道者ピリポの家に入って、そこに滞在した。

(1) トレマイからカイザリヤまでは、南に約50キロの船旅である。

①陸路を行った可能性もあるが、恐らく船旅であろう。

②カイザリヤの港は広大で、大きな船でも入港しやすい。

③カイザリヤは、ヘロデ大王が建設した港町で、今もその遺跡が残っている。

④一行は、予定よりも1週間以上も早くカイザリヤに着いたようである。

*祭りを祝うためにすぐにエルサレムに上る必要はない。

*幾日かカイザリヤに滞在する余裕が出来た。

(2) ここで、伝道者ピリポが久しぶりに登場する。

①前回彼が登場したのは、使 8 : 40 であった。

Act 8:40 それからピリポはアゾトに現れ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。

②彼は、使徒ピリポではなく、伝道者ピリポである。

③「あの七人のひとり」とは、執事のひとりである（使 6 : 1～5）

④ピリポの奉仕

*エルサレム教会で、執事のひとりとして食卓に仕えた。

*初めてサマリア人伝道を行った。

*エチオピア人の宦官を救いに導いた。

*カイザリヤに定住し（約 20 年前）、家庭を築いた。

*カイザリヤの教会を導き、主にある旅人たちをもてなした。

⑤パウロとピリポが知り合いであったかどうかは、分からない。

*使徒の働きの中では、初めての出会いである。

2. 9 節

Act 21:9 この人には、預言する四人の未婚の娘がいた。

(1) ピリポには 4 人の未婚の娘がいた。

①彼らには、預言の賜物が与えられていた。

②新約聖書が完成する前の時代には、預言の賜物は重要であった。

③神の声を聞き、それを信者に伝える能力が預言の賜物である。

④預言の賜物は、男性限定ではなかったことが分かる。

(2) ここではなんの預言も語っていないのに、なぜルカは 4 人を紹介しているのか。

①初期の伝承では、ピリポと 4 人の娘はヒエラポリス（小アジア）に移住した。

②その町でこの 4 人は、パピアスにエルサレム教会の初期の歴史を教えた。

③ルカもまた、カイザリヤ滞在中にこの 4 人から同様の情報を得たのであろう。

④当然、ピリポからも情報を得たはずである。

Ⅲ. アガボの預言（10～14 節）

1. 10 節

Act 21:10 幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。

(1) 預言者アガボの登場

①使 11 : 27～28

Act 11:27 そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来た。

Act 11:28 その中のひとりでアガボという人が立って、世界中に大ききんが起これと御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウデオの治世に起こった。

②パウロとアガボは、旧知の仲であった。

③アガボの預言は、クラウデオ帝の治世に成就した。

＊クラウデオの治世は、紀元 44～54 年。

＊ききんは、アガボが預言した年に始まった。

＊特に、紀元 46 年のききんが激しかった。

(2) アガボは、エルサレムを拠点に奉仕をしていた。

①ここでは、アガボはパウロに預言を伝えるためにカイザリヤに下ってきた。

2. 11 節

Act 21:11 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される』と聖霊がお告げになっています』と言った。

(1) 彼は、旧約聖書の預言者たちの系譜に立ち、劇的に預言を語った。

①1 列 11：29～31（アヒヤは、着ていた新しい外套を 12 切れに引き裂いた）

②イザ 20：2～4、エレ 13：1～7、エゼ 4 章

③「聖霊がお告げになっています」は、「【主】は言われる」（旧約）と同じである。

④アガボは、自分が語る預言の源は、聖霊であると宣言している。

(2) パウロに対する預言の内容

①パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛った。

②この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に逮捕され、異邦人の手に渡される。

＊ユダヤ人がパウロの逮捕を画策し、ローマ人がそれを実行した。

③しかし、パウロはすでにこのことを主から知らされており、動揺はない。

④彼には、エルサレムで逮捕されることは、主の計画であるとの確信があった。

3. 12 節

Act 21:12 私たちはこれを聞いて、土地の人たちといっしょになって、パウロに、エルサレムには上らないよう頼んだ。

(1) パウロの同行者たちもカイザリヤの信者たちも、パウロのことを心配した。

①彼らは、パウロに、エルサレムには上らないように頼んだ。

②これは、愛に基づく忠告である。

＊その中には、ルカも含まれていた。

③しかし、人間的な愛に基づく忠告は、危険な場合がある。

4. 13～14 節

Act 21:13 するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています」と答えた。

Act 21:14 彼が聞き入れようとしないので、私たちは、「主のみこころのままに」と言って、黙ってしまった。

(1) 彼らの忠告は、パウロにさらなる痛みと悲しみを与えるだけであった。

①パウロは、自分の命以上に、主イエスの命令に従うことを重視した。

②彼の心は定まっていた。

③彼らは、「主のみこころのままに」と言って、黙ってしまった。

④これは、クリスチャンが祈るべき最後の祈りである。

結論：

1. パウロの最終目標

(1) エルサレムで宣教する。

①使 9 : 15

Act 9:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

②使 9 : 16

Act 9:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

(2) 異邦人教会からの献金を届ける。

①コリントから船出しようとした際に、ユダヤ人の陰謀があったので計画を変更した(使 20 : 3)。まだ死ぬわけにはいかない。

②パウロは、ユダヤ人信者と異邦人信者の一致を求めた。

③エペ 2 : 14～16

Eph 2:14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

Eph 2:15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

Eph 2:16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。

敵意は十字架によって葬り去られました。

④エペ 3 : 6

Eph 3:6 その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。

2. パウロのゲツセマネ

(1) イエスのゲツセマネの園での祈り（ルカ 22 : 42）

Luk 22:42 「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

①イエスは2つの可能性について祈り、最後は御心を優先させた。

②イエスを選んだのは、苦しいが神の栄光が現れる道であった。

(2) カイザリヤは、パウロのゲツセマネである。

①カイザリヤで、パウロに2つの道が示された。

*周りの信者たちが提案した、エルサレムに上らないという道

*危険が待っているが、エルサレムに上るという道

②最後は、「主のみこころのままに」という祈りが勝った。

③ルカは、カイザリヤでのパウロの葛藤をゲツセマネの祈りとして描いている。

3. パウロの評価

(1) 第三次伝道旅行の要約

①前2回の伝道旅行よりも、行動の記録が少ない。伝道の成果は大いにあった。

②第三次伝道旅行では、パウロの動機や内面が明らかに示されている。

③第三次伝道旅行では、悲しみや痛みを知る等身大のパウロが描かれている。

④彼は、神の恵みによって広大なローマ帝国に福音を伝える選びの器であった。

(2) 諸教会から受けた歓迎

①初期の頃、パウロを疑う信者は多くいた。

②しかし彼は、ツロ、トレマイ、カイザリヤで大いに歓迎された。

③最初からの信者たちからも敬愛された。

*ピリピ、アガボ、マナソン（使 21 : 16）との親交

④パウロは、信頼を勝ち取った。

(3) キリスト教史の中で受けてきた評価

①主イエス・キリストに続いて、世界中の信者から敬愛されている。

②パウロの信頼性は、そのまま新約聖書の信頼性につながる。

③彼が命懸けで教えようとしたのは、ユダヤ人信者と異邦人信者の一致である。

「エルサレム到着」

使徒 21：15～26

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロは、カイザリヤからエルサレムに行こうとしている。
- ②第三次伝道旅行は、4,300 キロにも及んだ。
- ③エルサレムで起こる出来事は、福音がローマでさらに広がる原因となる。

(2) アウトライン

- ①カイザリヤからエルサレムへ（15～16 節）
- ②長老たちへの報告（17～19 節）
- ③長老たちからの助言（20～25 節）
- ④助言の実行（26 節）

結論：聖書を読む際の視点（大局観）（perspective）

- 1. 歴史は、複雑系の出来事として進展していく。
- 2. パウロのエルサレム訪問は、キリスト教史の分岐点になる。

パウロのエルサレム訪問から霊的教訓を学ぶ。

I. カイザリヤからエルサレムへ（15～16 節）

1. 15～16 節

Act 21:15 こうして数日たつと、私たちは旅仕度をして、エルサレムに上った。

Act 21:16 カイザリヤの弟子たちも幾人か私たちと同行して、古くからの弟子であるキプロス人マナソンのところに案内してくれた。私たちはそこに泊まることになっていたのである。

(1) カイザリヤからエルサレムまでは、馬（徒歩）で2日の旅である。

- ①カイザリヤから南東に約 100 キロ行くとエルサレムに着く。
- ②パウロは、五旬節の祭りの前にエルサレムに着く必要があった。

(2) 「私たち」とは誰か。

- ①パウロとその同行者たち（ルカも含まれる）
- ②カイザリヤの教会の代表者たち

(3) カイザリヤの信者たちは、一行をマナソンの家に案内した。

①マナソンの家は、カイザリヤとエルサレムの間にあり、一行はそこで一泊した。

②「古くからの弟子であるキプロス人マナソン」

＊マナソンは、バルナバと同じくキプロス島出身である。

③五旬節のペテロのメッセージで信者になった 3 千人のひとりか（使 2 : 41）。

④あるいは、ペテロのメッセージで信者になった 5 千人のひとりか（使 4 : 4）。

⑤マナソンは、ヘレニストのユダヤ人である。

＊ユダヤ人信者と異邦人信者が混在するグループをもてなすことができた。

II. 長老たちへの報告（17～19 節）

1. 17 節

Act 21:17 エルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで私たちを迎えてくれた。

(1) 一行は、五旬節の祭りの前にエルサレムに着いた。

①一行は、エルサレムの信者たちから歓迎された。

2. 18～19 節

Act 21:18 次の日、パウロは私たちを連れて、ヤコブを訪問した。そこには長老たちがみな集まっていた。

Act 21:19 彼らにあいさつしてから、パウロは彼の奉仕を通して神が異邦人の間でなさったことを、一つ一つ話した。

(1) 「**次の日**」とは、恐らく、五旬節の祭りの 2 日前であろう。

①パウロは、一行を連れてヤコブを訪問した。

②この時期になると（紀元 57 年）、12 使徒たちはエルサレムにはいなかった。

＊彼らは、エルサレム以外の地で巡回伝道を展開していた。

③エルサレム教会は世代交代を経験していた。

＊ヤコブ（主イエスの弟）と長老たちによって導かれていた。

(2) パウロの訪問は、予期されていたことである。

①エルサレム教会のリーダーたちがみな集まっていた。

②パウロがヤコブに会うのは、ほぼ 5 年ぶりである。

③使 18 : 22（第二次伝道旅行の終わり）

Act 18:22 それからカイザリヤに上陸してエルサレムに上り、教会にあいさつしてからアンテオケに下って行った。

(3) パウロは、第三次伝道旅行で起こったことを証した。

- ①異邦人がたくさん救われた。
- ②それは神がなさったことである。
- ③そのために自分が用いられた。

(4) パウロはこの段階で、異邦人教会からの献金を捧げた。

①使 24 : 17

Act 24:17 さて私は、同胞に対して施しをし、また供え物をささげるために、幾年ぶりかで帰って来ました。

②ルカは献金に触れていないが、パウロにとっては重要なことであった。

* ロマ 15 : 25～28

* 1 コリ 16 : 1～4

* 2 コリ 8 : 13～14、9 : 12～13

* ガラ 2 : 10

Ⅲ. 長老たちからの助言 (20～25 節)

1. 20 節

Act 21:20 彼らはそれを聞いて神をほめたたえ、パウロにこう言った。「兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰に入っている者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たちです。」

(1) エルサレム教会のリーダーたちの反応

①彼らは、神をほめたたえた。

* パウロによる異邦人伝道を喜び、認定した。

* 異邦人教会からの献金を喜んで受け取ったことが示唆されている。

②次に彼らは、慎重に扱うべき問題を持ち出した。

* パウロに対するユダヤ人信者の誤解を解く必要があった。

(2) 「ユダヤ人の中で信仰に入っている者は幾万となくありますが」

①「幾万」「何万」「数万」(more than twenty thousands)

②少なくとも 2 万人以上である。4～5 万人でもおかしくない。

③祭りのためにエルサレムに滞在していたユダヤ人信者もいた。

④しかし、大半がエルサレムに住むユダヤ人信者であった。

⑤彼らは「みな律法に熱心な人たち」であった。

* つまり、モーセの律法やユダヤ教の習慣を守ることに関心であった。

⑥紀元 1 世紀のユダヤ人信者たちの意識は、以下のようなものである。

- * 律法を守ることは救いの条件ではない。
- * しかし、ユダヤ人として律法に従って生きることを選ぶ。
- * トーラーは、ユダヤ人のアイデンティティと密接に結びついている。
- * トーラー遵守は、神学上の問題であるだけでなく、文化的問題でもある。
- * トーラーの否定は、ユダヤ性の放棄と同じ意味になる。

2. 21～22 節

Act 21:21 ところで、彼らが聞かされていることは、あなたは異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むな、と言って、モーセにそむくように教えているということなのです。

Act 21:22 それで、どうしましょうか。あなたが来たことは、必ず彼らの耳に入るでしょう。

(1) パウロに対する 2 つの誤解

- ① 離散の地のユダヤ人に、子どもに割礼を施すなと教えている。
- ② また、ユダヤ教の慣習に従って歩むなと教えている。

(2) しかし、パウロがユダヤ人として律法を大切にしていたことは明白である。

- ① パウロは、テモテに割礼を受けさせた（使 16 : 3）。
- ② ユダヤ人に対してはユダヤ人のようになった（1 コリ 9 : 20）。
- ③ 彼は、律法を行うことが救いの条件になることを否定しただけである。

(3) パウロに関する悪評をばらまいた者たちがいた。

- ① エペソから来たユダヤ人の一派がそれである。
- ② 彼らは、神殿で騒動を起こすことになる（使 21 : 27 以降）。
- ③ パウロがエルサレムにいることは、やがて彼らの耳に入るに違いない。
- ④ そこで、事前に対応策を講じる必要がある。
- ⑤ エルサレム教会のリーダーたちは、パウロに助言を与えた。
- ⑥ 隠れるのは不可能なので、公の場で律法に熱心であることを示すべきである。

3. 23～24 節

Act 21:23 ですから、私たちの言うとおりにしてください。私たちの中に誓願を立てている者が四人います。

Act 21:24 この人たちを連れて、あなたも彼らと一しょに身を清め、彼らが頭をそる費用を出してやりなさい。そうすれば、あなたについて聞かされていることは根も葉もないことで、あなたも律法を守って正しく歩んでいることが、みなにわかるでしょう。

(1) 「私たちの中に誓願を立てている者が四人います」

①これはナジル人の誓願である（民 6：1～21）。

＊誓願の期間、髪を剃らない、ぶどう酒を飲まない、儀式的汚れを避ける。

②この誓願を立てているユダヤ人信者が 4 人いる。誓願の内容は分からない。

③パウロも、この誓願を立てたことがあった（使 18：18）。

＊彼は、ケンクレアで髪を剃った。

(2) 誓願が終わった時に、彼らを援助すれば、律法を守っているという証明になる。

①彼らと一しょに儀式的清めを実行する。

②頭を剃る費用を出してやる。

＊これは、神殿での捧げ物のことである。

4. 25 節

Act 21:25 信仰に入った異邦人に関しては、偶像の神に供えた肉と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けるべきであると決定しましたので、私たちはすでに手紙を書きました。」

(1) エルサレム教会のリーダーたちは、2 つのことを確認した。

①ユダヤ人信者には、律法を守る自由がある。

②異邦人信者には、律法を守らない自由がある。

＊これは、エルサレム会議の決定事項の確認である。

＊ユダヤ人信者との交わりのために、異邦人信者は最低限の配慮をする。

(2) 紀元 1 世紀のユダヤ人信者の意識を理解する必要がある。

①彼らは、異邦人のキリスト教をユダヤ的な信仰にしようとしているのではない。

②彼らは、ユダヤ人のキリスト教が異邦人的なものにならないようにしている。

IV. 助言の実行 (26 節)

1. 26 節

Act 21:26 そこで、パウロはその人たちを引き連れ、翌日、ともに身を清めて宮に入り、清めの期間が終わって、ひとりひとりのために供え物をささげる日時を告げた。

(1) 翌日からパウロは、4 人とともに神殿に入り、7 日間の清めの過程を開始した。

①パウロは 5 年間エルサレム（イスラエルの地）から離れていたもので、汚れていると見なされた。

②5 年間の汚れのためには、1 週間の清めのプロセスを通過する必要があった。

③また誓願の終了日を祭司に伝え、いけにえを屠る準備を始めた。

④ひとり当たりの供え物

- *雄の子羊1頭(全焼のいけにえ)
- *雌の子羊1頭(罪のためのいけにえ)
- *雄羊1頭(和解のいけにえ)
- *かご1杯の種なしパン(穀物の捧げ物)
- *壺1杯のぶどう酒(注ぎの捧げ物)

⑤大きな犠牲ではあるが、これはパウロの善行(ミツヴァ)と見なされる。

結論：聖書を読む際の視点(大局観)(perspective)

1. 歴史は、複雑系の出来事として進展していく。

(1) 歴史は、部分が全体に、全体が部分に影響しあって複雑に展開して行く。

①エルサレムで逮捕されたことが、次の目的につながって行く。

(2) パウロの2つの目的

①エルサレムに上る。

②ローマに行く。

(3) 使19:21(エペソでの暴動の後)

Act 19:21 これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

①エルサレム到着により最初の目的は達成された。

②エルサレムで逮捕されたことが、次の目的につながって行く。

③今後の物語の展開(ルカは、神がどのように働かれるかを記している)

*使21:17~23:35 エルサレムからカイザリヤへ(12日間)

*使24:1~26:32 カイザリヤにて(2年間)

2. パウロのエルサレム訪問は、キリスト教史の分岐点になる。

(1) ルカがエルサレム訪問の出来事を詳細に記録している理由は、何か。

①エルサレム訪問自体が、重要な出来事である。

②しかしルカは、それ以上の視点をもってエルサレムでの出来事を書いている。

③彼は、異邦人からの献金については触れていない(パウロの視点とは異なる)。

(2) ルカが伝えようとしたこと視点(大局観)(perspective)

①エルサレム(ユダヤ人)は、福音を拒否した。

②異邦人は、福音を受け入れた。

「パウロの逮捕」

使徒 21：27～40

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①パウロはエルサレムに着き、長老たちと交流した。

②パウロは、異邦人教会からの献金を届けた。

③エルサレムの長老たちはパウロに助言した。

＊悪い噂があるので、律法を否定していないことを示す必要がある。

＊ナジル人の誓願をしている 4 人の兄弟たちのために、髪を剃る費用を出す。

④そこでパウロは、それを実行する。

＊使 21：26

Act 21:26 そこで、パウロはその人たちを引き連れ、翌日、ともに身を清めて宮に入り、清めの期間が終わって、ひとりひとりのために供え物をささげる日時を告げた。

⑤ひとり当たりの供え物（民 6 章）

＊雄の子羊 1 頭（全焼のいけにえ）

＊雌の子羊 1 頭（罪のためのいけにえ）

＊雄羊 1 頭（和解のいけにえ）

＊かご 1 杯の種なしパン（穀物の捧げ物）

＊壺 1 杯のぶどう酒（注ぎの捧げ物）

⑥大きな犠牲ではあるが、これはパウロの善行（ミツヴァ）と見なされる。

⑦神殿の画像

(2) アウトライン

①神殿内での暴動（27～30 節）

②千人隊長の介入（31～36 節）

③パウロの危機管理（37～40 節）

結論：

1. パウロの危機管理

2. 「隔ての壁」

パウロの危機管理から霊的教訓を学ぶ。

I. 神殿内での暴動（27～30 節）

1. 27～28 節 a

Act 21:27 ところが、その七日がほとんど終わろうとしていたころ、アジヤから来たユダヤ人たちは、パウロが宮にいるのを見ると、全群衆をあおりたて、彼に手をかけて、

Act 21:28a こう叫んだ。

(1) 「ところが、その七日がほとんど終わろうとしていたころ、」

- ①祭りの期間、100 万人以上のユダヤ人たちがエルサレムに滞在していた。
- ②五旬節は終わっていたが、多くの巡礼者たちがエルサレムに留まっていた。
- ③パウロは、清めのための 7 日を神殿で過ごした。
- ④供え物を捧げる時が目前に迫っていた。

(2) ところが、アジヤから来たユダヤ人たちが問題を起こした。

- ①彼らは、第二次伝道旅行でパウロを迫害したエペソのユダヤ人たちである。
- ②彼らは不信者であり、熱狂的な律法主義者である。

*ディアスポラの地からエルサレムに上って来ること自体が、熱狂的な証拠。

- ③彼らは、パウロが神殿にいるのを見た。
- ④そこで群衆を扇動し、パウロに手をかけて、こう叫んだ。

2. 28b～29 節

Act 21:28b 「イスラエルの人々。手を貸してください。この男は、この民と、律法と、この場所に逆らうことを、至る所ですべての人に教えている者です。そのうえ、ギリシヤ人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所をけがしています。」

Act 21:29 彼らは前にエペソ人トロピモが町でパウロといっしょにいるのを見かけたので、パウロが彼を宮に連れ込んだのだと思ったのである。

(1) 彼らが騒いだ理由は次の 2 つある。

①パウロは、誤った教えを教えている。

*この民と律法と神殿に逆らうことを、至る所ですべての人に教えている。

*これは、ステパノに対する批判の内容と似ている（使 6：13～14）。

*しかしパウロは、律法や神殿を否定したわけではない。

②パウロは、異邦人を神殿の中に連れ込んで神殿を冒涇している。

*異邦人は、異邦人の庭までしか入れなかった。

*神殿に入った異邦人は、死刑に処せられる。

*ローマは、この死刑の権利だけは認めざるを得なかった。

(2) 彼らの怒りの原因

①「前にエペソ人トロピモが町でパウロといっしょにいるのを見かけた」

- ②トロピモは、エペソ教会の代表として献金をエルサレムに運んだ人物である。
- ③偏見があるので、パウロを見ただけで、トロピモを神殿に連れ込んだと思った。
- ④つまり、異邦人が「隔ての壁」（隔ての中垣）を超えて聖所に入ったということ。

3. 30 節

Act 21:30 そこで町中が大騒ぎになり、人々は殺到してパウロを捕らえ、宮の外へ引きずり出した。そして、ただちに宮の門が閉じられた。

(1) もし本当にトロピモが神殿に入っていたとするなら、それは死刑に値する。

- ①町中が大騒ぎになった（誇張法？）。
- ②人々は殺到して、パウロを捕えた。
- ③パウロを神殿の外に引きずり出し、宮の門を閉じた。

＊神殿内で血を流すことは、冒流罪に当たる。

＊神殿内では、彼らは手加減しながらパウロを打っていた。

＊神殿の門を閉じてから、パウロを異邦人の庭で殺そうとしたのである。

Ⅱ. 千人隊長の介入（31～36 節）

1. 31～32 節

Act 21:31 彼らがパウロを殺そうとしていたとき、エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が、ローマ軍の千人隊長に届いた。

Act 21:32 彼はただちに、兵士たちと百人隊長たちとを率いて、彼らのところに駆けつけた。人々は千人隊長と兵士たちを見て、パウロを打つのをやめた。

(1) この騒ぎは、ただちに千人隊長に報告された。

- ①神殿の北西には、神殿域全体を見下ろせるアントニア要塞がそびえ立っていた。
- ②祭りの期間、厳重な警備体制が敷かれ、兵士たちが常時神殿の監視に当たった。

＊約 50 年に渡るユダヤ人支配の経験から、このことを学んだ。

- ③神の民が、ローマ軍の監視下に置かれていることの悲劇について考えてみよう。

＊その原因は、ユダヤ人たちの不信仰にあった。

＊私たちも、不信仰のゆえに神以外のものに隷属させられることがある。

(2) 暴動を静めたのは、クラウデオ・ルシヤ（使 23：26）という千人隊長である。

- ①千人隊長は、兵士たちと百人隊長たちとを率いて、彼らのところに駆けつけた。
- ②それを見た暴徒たちは、パウロを打つのを止めた。
- ③暴動を起こす側も、静める側も、命懸けである。

＊暴動を起こす者たちは、死刑に処せられる。

＊暴動を静めることができない兵士たちも、死刑に処せられる。

2. 33～34 節

Act 21:33 千人隊長は近づいてパウロを捕らえ、二つの鎖につなぐように命じたうえ、パウロが何者なのか、何をしたのか、と尋ねた。

Act 21:34 しかし、群衆がめいめい勝手なことを叫び続けたので、その騒がしさのために確かなことがわからなかった。そこで千人隊長は、パウロを兵営に連れて行くように命令した。

(1) パウロは、二つの鎖につながれた。

①これは、重大犯人を扱うときの方法である。

②2 人の兵士たちと鎖でつながれたのであろう。

(2) 千人隊長は、なぜパウロが騒ぎの原因になっているのかを群衆にたずねた。

①しかし、群衆があまりにも混乱していたため確かなことは分からなかった。

②そこで千人隊長は、尋問のためにパウロを要塞の中に連行することにした。

3. 35～36 節

Act 21:35 パウロが階段にさしかかったときには、群衆の暴行を避けるために、兵士たちが彼をかつぎ上げなければならなかった。

Act 21:36 大ぜいの群衆が「彼を除け」と叫びながら、ついて来たからである。

(1) パウロが連行される途中、群衆は兵士たちに守られるパウロを奪還しようとした。

①兵士たちは、パウロをかつぎ上げた。

(2) 使 21 : 36（訳文の比較）

「大ぜいの群衆が『彼を除け』と叫びながら、ついて来たからである」（新改訳）

「大勢の民衆が、『殺してしまえ』と叫びながら、ついて来たからである」（新改 2017）

「大勢の民衆が、『その男を殺してしまえ』と叫びながらついて来たからである」

（新共同訳）

「大ぜいの民衆が『あれをやっつけてしまえ』と叫びながら、ついてきたからである」

（口語訳）

①ルカ 23 : 18 との類似性

Luk 23:18 しかし彼らは、声をそろえて叫んだ。「この人を除け。バラバを釈放しろ。」

②「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」（新改訳 2017）

Ⅲ. パウロの危機管理（37～40 節）

1. 37～38 節

Act 21:37 兵営の中に連れ込まれようとしたとき、パウロが千人隊長に、「一言お話ししてもよいでしょうか」と尋ねると、千人隊長は、「あなたはギリシア語を知っているのか。

Act 21:38 するとあなたは、以前暴動を起こして、四千人の刺客を荒野に引き連れて逃げた、あのエジプト人ではないのか」と言った。

(1) アントニア要塞に連行されようとした時、パウロは千人隊長に話しかけた。

①パウロがギリシア語で話しかけたので、千人隊長は非常に驚いた。

(2) 千人隊長は、自分の誤解に気づき、こう確かめる。

①「あなたは暴動を起こしたあのエジプト人ではないのか」

②ユダヤ人の歴史家ヨセフスは、このエジプト人についての記録を残している。

「自ら預言者を名乗るエジプト人が、民衆をだまして、オリブ山に結集するように扇動した。しかし、その暴徒の一群はローマ総督フェリクスによって弾圧され、400 人が殺され、200 人が捕虜となった」

③首謀者であるエジプト人は逃れた。

④千人隊長は、そのエジプト人が戻って来たと思った。

2. 39～40 節

Act 21:39 パウロは答えた。「私はキリキヤのタルソ出身のユダヤ人で、れっきとした町の市民です。お願いします。この人々に話をさせてください。」

Act 21:40 千人隊長がそれを許したので、パウロは階段の上に立ち、民衆に向かって手を振った。そして、すっかり静かになったとき、彼はヘブル語で次のように話した。

(1) パウロは、自己紹介をした。。

①キリキヤのタルソ出身のユダヤ人である。

②その町の市民。つまりローマの市民である。

③自分はローマ市民なので、反ローマ運動とは何の関係もない。

(2) 次に、群衆に弁明する機会を千人隊長に求め、千人隊長はそれを許可した。

①パウロはこれを伝道の機会と捉えた。

②神殿からアントニアの要塞に上る階段の上に立ち、民衆に向かって手を振った。

*これは、人々を静めるための動作である。

*パウロが手を振るのを見て、民衆は静まった。

*物音一つしないほどの静寂がやって来た。

③パウロは、今度はヘブル語で話し始めた。

結論：

1. パウロの危機管理

(1) 動揺してもおかしくない状況で冷静さを保つのは、容易なことではない。

①しかしパウロは、暴動の渦中に置かれても平安を失わなかった。

(2) 危機管理のための 2 つの武器

①彼は、礼儀正しい態度で千人隊長に接した。

*「一言お話ししてもよいでしょうか」は、丁寧な言葉である。

*礼儀正しい態度が、弁明の機会を得るきっかけとなった。

②彼は、終始冷静さを保った。

*彼の冷静な態度は、大声で叫んでいる群衆の狂気とは好対照をなしている。

*大声ではなく、静かな言葉の中にこそ力がある。

(ILL) 1995 年のアメリカ映画『アポロ 13』

①月面着陸船アポロ 13 号爆発事故（1970 年 4 月）の実話に基づく作品である。

②3 名の宇宙飛行士の物語

2. 隔ての壁（中垣）

(1) 当時の神殿には、「隔ての壁」と呼ばれるものがあつた。

①異邦人の庭と婦人の庭を仕切る高さ 1.2 メートルほどの木の柵

②ヨセフスによれば、この柵の中（内庭）に侵入する異邦人は死刑に処せられるとの警告文が掲げられていた。

*写真②

(2) 旧約時代には、異邦人は神殿の内庭に入ることができなかった。

①「隔ての壁」が、ユダヤ人と異邦人を分離していたのである。

②その壁は、イエス・キリストの十字架によって取り去られた。

③それどころか、聖所と至聖所の隔ての垂れ幕までも開かれた。

Mat 27:51 すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。

④エペソ 2 : 14～16

Eph 2:14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

Eph 2:15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

Eph 2:16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。

「パウロの弁明（1）」

使徒 22：1～16

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①エルサレムの長老たちはパウロに助言した。

＊悪い噂があるので、律法を否定していないことを示す必要がある。

＊ナジル人の誓願をしている 4 人の兄弟たちのために、髪を剃る費用を出す。

②そこでパウロは、それを実行しようとした。

③ところが、パウロを神殿で見かけたユダヤ人たちは、騒動を起こした。

＊アジア（エペソ）から来たユダヤ人たちが煽動者であった。

＊彼らは、パウロが異邦人を神殿に連れ込んだと思い込んだ。

④殺される寸前で、千人隊長の介入があった。

⑤パウロは、千人隊長の許可を得て、群衆に語りかけた。

⑥パウロの危機管理

＊彼は、礼儀正しい態度で千人隊長に接した。

＊彼は、終始冷静さを保った。

⑦使 21：40

Act 21:40 千人隊長がそれを許したので、パウロは階段の上に立ち、民衆に向かって手を振った。そして、すっかり静かになったとき、彼はヘブル語で次のように話した。

(2) アウトライン

①かつての自分（1～5 節）

②回心（6～11 節）

③洗礼（12～16 節）

結論：

1. 聖霊はどのように働かれたのか。
2. 洗礼は救いの条件か。
3. 奥義とは何か。

パウロのスピーチから霊的教訓を学ぶ。

I. かつての自分（1～5 節）

1. 1～2 節

Act 22:1 「兄弟たち、父たちよ。いま私が皆さんにしようとする弁明を聞いてください。」

Act 22:2 パウロがヘブル語で語りかけるのを聞いて、人々はますます静粛になった。そこでパウロは話し続けた。

(1) このスピーチの特徴

- ①使 22：1～26：29 で、5回パウロのスピーチが出て来る。
- ②このスピーチは、最初のものである。
- ③それまでは伝道的なスピーチであったが、これ以降は弁明的なものになる。

(2) 「兄弟たち、父たちよ」という呼びかけ

- ①敬意を表わす呼びかけであり、慣用句でもある。
- ②使 7：2 のステパノのスピーチ（サンヘドリンにおいて）

Act 7:2 そこでステパノは言った。「兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父アブラハムが、ハランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、

(3) このスピーチのゴールは、弁明である。

- ①自分は、神に対して、律法に対して、神殿に対して敵対する者ではない。
- ②異邦人伝道は、神から自分に与えられた使命である。

(4) 「パウロがヘブル語で語りかけるのを聞いて、人々はますます静粛になった」

- ①パウロは、ギリシア語ではなくヘブル語（アラム語）で語り始めた。
- ②アラム語は、神殿内で使用する言葉である。
- ③ユダヤの住民、ガリラヤの住民、ディアスポラのユダヤ人は、理解できた。
*ローマ兵たちには理解できなかったであろう。
- ④律法に熱心な者たちのパウロに対する認識が、相当変わったと思われる。
*ディアスポラのユダヤ人なのに、アラム語ができる。

2. 3 節

Act 22:3 「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。

(1) パウロは、自分もまた律法に熱心な者であったと証言する。

- ①キリキヤのタルソで生まれたユダヤ人である。
*文法的には、現在形が使われている。
*イエスを信じたからと言って、ユダヤ人でなくなるわけではない。
*イエスへの信仰とユダヤ性とは両立する。
*ユダヤ人のメシアを信じることは、ユダヤ人として当然のことである。

②若い頃からエルサレムで育てられた。

＊12～13 歳でエルサレムにやって来たと思われる。

③パリサイ派の教育を受けた。

＊当時最も尊敬されていたガマリエルから学んだ。

(2) パウロは、律法に対する熱心さでは誰にも負けないと言いたいのである。

①その例として、教会に対して行った迫害を上げる。

3. 4～5 節

Act 22:4 私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投じ、死にまでも至らせたのです。

Act 22:5 このことは、大祭司も、長老たちの全議会も証言してくれます。この人たちから、私は兄弟たちへあてた手紙までも受け取り、ダマスコへ向かって出発しました。そこにいる者たちを縛り上げ、エルサレムに連れて来て処罰するためでした。

(1) 自分は、「この道」を迫害した。

①当時、「この道」という言葉は、ユダヤ人の間で広く認識されていた。

②殉教者の死については、自分にも責任がある。

(2) この迫害は、サンヘドリンの許可を得て行ったものである。

①このことを疑う者は、大祭司とサンヘドリンに確かめればよい。

②当時の大祭司カヤパも、当時の議員たちの多くも、まだ生きている。

II. 回心（6～11 節）

1. 6 節

Act 22:6 ところが、旅を続けて、真昼ごろダマスコに近づいたとき、突然、天からまばゆい光が私の回りを照らしたのです。

(1) パウロのダマスコ体験は、使徒の働きの中に 3 回出て来る。

①使 9：1～19（三人称で書かれている）

②使 22：6～16（一人称で書かれている）

③使 26：12～18（一人称で書かれている）

(2) パウロは、天からのまばゆい光に照らされた。

①この光は太陽よりも明るい光、シャカイナグローリー（神の栄光の光）である。

2. 7～9 節

Act 22:7 私は地に倒れ、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか』という声を聞きました。

Act 22:8 そこで私が答えて、『主よ。あなたはどなたですか』と言うと、その方は、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスだ』と言われました。

Act 22:9 私と一しょにいた者たちは、その光は見たのですが、私に語っている方の声は聞き分けられませんでした。

(1) パウロは地に倒れた。

①と言うよりも、地にひれ伏したのである。

②神の臨在の前でひれ伏すのは、ユダヤ人としては当然の反応である。

(2) 次に、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声を聞いた。

①回りの者たちは音を聞いただけで、声は認識できなかった。

②「主よ。あなたはどなたですか」

③「わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスだ」

*「ナザレ」という言葉は、3 回の回心の記事の中でここだけに出てくる。

*イエス自ら、軽蔑された呼び名を使っている。

④クリスチャンが迫害される時、主イエスご自身が迫害されているのである。

3. 10～11 節

Act 22:10 私が、『主よ。私はどうしたらよいのでしょうか』と尋ねると、主は私に、『起きて、ダマスコに行きなさい。あなたがするように決められていることはみな、そこで告げられる』と言われました。

Act 22:11 ところが、その光の輝きのために、私の目は何も見えなかったもので、一しょにいた者たちに手を引かれてダマスコに入りました。

(1) パウロは、「主よ。私はどうしたらよいのでしょうか」と尋ねた。

①神に忠実なユダヤ人としては、当然の反応である。

②この時点で、パウロは回心を体験していたことが分かる。

(2) 主はパウロに、「ダマスコに行きなさい」と命じた。

①パウロは、旅の目的地に行けと命じられた。

②ダマスコに行く目的は、当初パウロが意図したものと正反対のことであった。

③パウロが為すべきことは、あらかじめ神によって定められていた。

(3) パウロは、シャカイナグローリーによって目が見えなくなっていた。

①その状態で、彼は手を引かれてダマスコに入って行った。

②盲目状態からの解放は、霊的な盲目からの解放を示唆している。

Ⅲ. 洗礼(12～16節)

1. 12～13節

Act 22:12 **すると、律法を重んじる敬虔な人で、そこに住むユダヤ人全体の間で評判の良いアナニヤという人が、**

Act 22:13 **私のところに来て、そばに立ち、『兄弟サウロ。見えるようになりなさい』と言いました。すると、そのとき、私はその人が見えるようになりました。**

(1) 盲目のパウロを助けたのは、アナニヤという人物である。

- ①彼は、律法に照らして「敬虔な人」と判断されるような生活を送っていた。
- ②また、メシアニックジューにもそうでないユダヤ人にも評判の良い人であった。
- ③これは、パウロの聴衆たちには意味のある情報である。

*使9:1～43には、アナニヤに関するこの情報は出て来ない。

(2) アナニヤはパウロを、「兄弟サウロ」と呼んでいる。

- ①パウロはこの時点ですでに救われており、アナニヤはそれを認識していた。
- ②彼が「見えるようになりなさい」と言うと、パウロの目が見えるようになった。

2. 14～15節

Act 22:14 **彼はこう言いました。『私たちの父祖たちの神は、あなたにみこころを知らせ、義なる方を見させ、その方の口から御声を聞かせようとお定めになったのです。』**

Act 22:15 **あなたはその方のために、すべての人に対して、あなたの見たこと、聞いたことの証人とされるのですから。**

(1) アナニヤはパウロに、神から聞いたことを伝える。

- ①ここでのアナニヤの言葉は、パウロの使徒職への召命になっている。

(2) パウロが受けた3つの祝福

- ①先祖の神のみこころを啓示される器となる。

*啓示の内容は「奥義」と呼ばれている(エペ3:1～13)。

- ②復活のイエスに出会う。

*「義なる方を見させ」とはそういう意味である。

*「義なる方」は、メシアの称号である。

*復活の主と出会ったことにより、使徒の資格が満たされた。

*1コリ9:1、15:8

③復活のイエスのことばを聞く。

(3) 以上の 3 つの祝福が与えられた理由は、「キリストの証人」となるためである。

①祝福には使命が伴う。

②神の国においては、傍観者はひとりもないはずである。

3. 16 節

Act 22:16 さあ、なぜためらっているのですか。立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい。』

(1) 洗礼は、すでに信仰によって罪を赦された者が受けるものである。

①この聖句は、誤解されて用いられることが多い。

結論：

1. 聖霊はどのように働かれたのか。

(1) パウロは、このスピーチを事前に用意していたわけではない。

(2) このスピーチをパウロに与えたのは、聖霊である。

(3) 主イエスの約束が成就している。

(4) マタ 10：19～20

Mat 10:19 人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。

Mat 10:20 というのは、話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊だからです。

2. 洗礼は救いの条件か。

(1) 使 22：16

Act 22:16 さあ、なぜためらっているのですか。立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい。』

(2) 洗礼は、罪を赦されるために受けるものではない。

(3) すでに信仰によって罪を赦された者が、主イエスの命令に従って受けるもの。

(4) パウロは復活のイエスに出会い、この方を信じた時点で、救われていた。

(5) 「自分の罪を洗い流しなさい」とは、象徴的言葉である。

①洗礼は、イエスとの一体化を表現するための象徴的儀式である。

②洗礼は、罪が清められたことを表現するための象徴的儀式である。

(6) 人は、信仰により恵みによって救われる。

（7）洗礼は救いの条件ではないが、主イエスの弟子として忠実に歩むためには必要不可欠なものである。

3. 奥義とは何か。

（1）エペ 3：3～6

Eph 3:3 先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。

Eph 3:4 それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずです。

Eph 3:5 この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。

Eph 3:6 その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。

（2）パウロが異邦人のための使徒となったのは、啓示による。

①パウロが伝えるメッセージは奥義であって、これもまた、神の啓示による。

②奥義とは、今までは隠されていたが、啓示によって明らかにされた真理である。

（3）奥義の内容

①福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということ。

②パウロがどんな試練の中にあっても大胆に福音を語れたのは、それが神から与えられた啓示であるという確信があったからである。

「パウロの弁明（2）」

使徒 22：17～29

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロを神殿で見かけたユダヤ人たちは、騒動を起こした。
 - *アジア（エペソ）から来たユダヤ人たちが煽動者であった。
 - *彼らは、パウロが異邦人を神殿に連れ込んだと思い込んだ。
- ②殺される寸前で、千人隊長の介入があった。
- ③パウロは、千人隊長の許可を得て、群衆に語りかけた。
- ④パウロの危機管理
 - *彼は、礼儀正しい態度で千人隊長に接した。
 - *彼は、終始冷静さを保った。

(2) パウロの弁明の 4 つのポイント

- ①かつての自分（1～5 節）
- ②回心（6～11 節）
- ③洗礼（12～16 節）
- ④神殿での幻（17～21 節）

(3) アウトライン

- ①神殿での幻（17～21 節）
- ②ユダヤ人たちの反応（22～23 節）
- ③千人隊長との対話（24～29 節）

結論：

- 1. 召命と苦難
- 2. ユダヤ人と律法

パウロのスピーチから霊的教訓を学ぶ。

I. 神殿での幻（17～21 節）

1. 17～18 節

Act 22:17 こうして私がエルサレムに帰り、宮で祈っていると、夢ごちになり、
Act 22:18 主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』

(1) この幻の記録は、ここにしか出て来ない。

①ダマスコ体験から、エルサレムに上るまでに約3年経過（#32参照）。

②9：20～22

Act 9:20 そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。

Act 9:21 これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。「この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。」

Act 9:22 しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。

③使9：21と22の間に、アラビヤ滞在の期間が入る。

④ガラ1：17

Gal 1:17 先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。

(2) 3年間のパウロの地理的移動

①回心直後のダマスコ会堂での伝道

②アラビヤ滞在（現在のヨルダン）

③ダマスコへの帰還と迫害からの逃避

④エルサレム訪問と迫害からの逃避

⑤タルソへの帰還

(3) パウロは、エルサレムの神殿で祈っていた。

①この説明あ、ユダヤ人たちに好印象を与えたと思われる。

②主は再び、パウロに語りかけた。

③「急いで、早くエルサレムを離れなさい」

＊使徒たちにとっては、エルサレムは安全な場所ではなかった。

＊パウロを殺したいと思っている者がたくさんいた。

④「人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです」

＊主は、ユダヤ人たちの心を見抜いておられた。

2. 19～20 節

Act 22:19 そこで私は答えました。『主よ。私がどの会堂でも、あなたの信者を牢に入れたり、むち打ったりしていたことを、彼らはよく知っています。』

Act 22:20 また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私もその場にいて、それに賛成し、彼を殺した者たちの着物の番をしていたのです。』

(1) パウロは、主の判断に同意しなかった。

①ユダヤ人たちは、パウロが信者を容赦なく迫害してきたことを知っていた。

②ステパノの殉教の際にも、パウロは重要な役割を果たしていた。

(2) 主よりも自分の方がよく分かっていると思ってしまうのは、人間の弱さである。

①ペテロの例（マタ 16：21～23）

②12使徒たちの例（マタ 26：31～35）

3. 21 節

Act 22:21 **すると、主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす』と言われました。」**

(1) 主は、エルサレムがステパノ同様パウロを拒否することを知っておられた。

①「行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす」

②使 9：15～16

Act 9:15 **しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」**

Act 9:16 **彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」**

③「王たち、イスラエルの子孫」が意図的に省略され、異邦人が強調されている。

(2) 異邦人は、「以前は遠く離れていた」と言われている（エペ 2：13）。

①パウロは、主によって異邦人伝道に派遣された使徒である。

Ⅱ. ユダヤ人たちの反応（22～23 節）

1. 22 節

Act 22:22 **人々は、彼の話ここまですべて聞いていたが、このとき声を張り上げて、「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない」と言った。**

(1) ここまで人々はパウロの話静静地に聞いて来た。

①パウロが見た 2 つの幻の話が、効果を発揮し始めたかに見えた。

(2) ところが、人々は突然怒りの感情を表わした。

①「異邦人」という言葉を聞いたからである。

②彼らは、異邦人伝道そのものに反対しているのではない。

＊預言者ヨナの場合がある。

＊パリサイ人たちも、異邦人をユダヤ教に改宗させようとしていた。

＊マタ 23：15

Mat 23:15 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、彼を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのです。

③ユダヤ教を経由しないで、異邦人に直接メシアを伝えることが問題なのである。

④これは、異邦人をユダヤ人と同じ位置に置くことに等しい。

⑤伝統的なユダヤ人の考え方では、これは究極的な背教である。

2. 23 節

Act 22:23 そして、人々がわめき立て、着物を放り投げ、ちりを空中にまき散らすので、

(1) 人々は怒りを表現した。

①着物を放り投げる（着物を裂くのは、深い落胆の表現である）。

②ちりを空中にまき散らすのは、嘆きの表現である。

③ここでは、投げるものがないので、着物とちりを投げているのであろう。

Ⅲ. 千人隊長との対話（24～29 節）

1. 24 節

Act 22:24 千人隊長はパウロを兵営の中に引き入れるように命じ、人々がなぜこのようにパウロに向かって叫ぶのかを知ろうとして、彼をむち打って取り調べるようにと言った。

(1) アラム語が分からない千人隊長は、当惑した。

①暴動がこれ以上広がることは容認できない。

②パウロを保護し、その後取り調べを行うしかない。

③千人隊長は、群衆が怒っている理由をなんとしても知りたいと思った。

(2) そこで、パウロをむちで打って自白させようとした（拷問による自白強要）。

①ローマのむち打ちは、非常に残酷なものであった。

②死に至ることや、後遺症が残ることがあった。

③パウロはユダヤ人から5度、ローマ人から3度、むちを受けた（2 コリ 11:25）。

2. 25 節

Act 22:25 彼らがむちを当てるためにパウロを縛ったとき、パウロはそばに立っている百人隊長に言った。「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むち打ってよいのですか。」

(1) パウロは、立ったまま両手両足を2本の柱にくくり付けられた。

①むち打ちが始まる直前に、パウロは百人隊長に言った。

②ここにも、パウロが敬意を払いながら行動しているという証拠がある。

(2)「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むち打ってよいのですか」

- ①ローマ市民を裁判にかけないで犯罪人扱いするのは、違法であった。
- ②さらに、ローマ市民は有罪であっても、むち打ちを免れた。
- ③これらの規定に違反するなら、その者は死刑になる。
- ④パウロは、間接的に自分がローマ市民であることを伝えたのである。
- ⑤百人隊長は、死刑に値する罪を犯す寸前に、その情報を得た。

3. 26～28 節

Act 22:26 これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところに行って報告し、「どうなさいますか。あの人はローマ人です」と言った。

Act 22:27 千人隊長はパウロのところに来て、「あなたはローマ市民なのか、私に言ってくれ」と言った。パウロは「そうです」と言った。

Act 22:28 すると、千人隊長は、「私はたくさんの金を出して、この市民権を買ったのだ」と言った。そこでパウロは、「私は生まれながらの市民です」と言った。

(1) 百人隊長は、むち打ちを中止し、千人隊長にこのことを報告した。

- ①百人隊長は、ことばだけでパウロがローマ市民であることを信じた。
- ②当時は、市民権の証明書は安全な場所に保管されていた。
- ③偽りの自己申告をすると、死刑に処せられた。

(2) 千人隊長はすぐにパウロのところに来た。

- ①パウロから直接、ローマ市民であるという証言を聞いた。
- ②彼もまた、パウロの証言をそのまま信じた。

(3)「私はたくさんの金を出して、この市民権を買ったのだ」

- ①あなたの場合は、もっと金がかかった（賄賂）でしょうという意味である。
- ②クラウデオの治世（41～54年）、市民権を買うことが可能であった（高額）。
- ③千人隊長の名前は「クラウデオ・ルシア」であった。

(4)「私は生まれながらの市民です」

- ①パウロの祖父か父が市民権を得た。
- ②ローマの高官によく仕えた者には、報奨として市民権が付与されていた。
- ③生まれながらの市民は、市民権を買った者よりも尊敬されていた。

4. 29 節

Act 22:29 このため、パウロを取り調べようとしていた者たちは、すぐにパウロから身を引いた。また千人隊長も、パウロがローマ市民だとわかると、彼を鎖につないでいたので、恐れた。

(1) ローマ市民を裁判にかけないで鎖につなぐのは、違法である。

①百人隊長も千人隊長も、自分たちは違法行為を働いたのではないかと恐れた。

結論

1. 召命と苦難

(1) 使 9 : 15～16

Act 9:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。

Act 9:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

①アナニヤがパウロに伝えた主のことば

②パウロの召命には、イエスの御名のために苦しむことも含まれていた。

③イエスの裁判とパウロの裁判には、共通点があった。

*ユダヤ議会（サンヘドリン）の前で

*ローマ人の総督の前で

*ユダヤ人の王の前で

④ともに無罪を宣言されたが、釈放はされなかった。

(2) ユダヤ人の不信仰

①イエスを拒否した。

②ペテロとヨハネを迫害した。

③ステパノを殺した。

④パウロを殺そうとした。

*使徒の働きの中では、このことが最終的な福音の拒否となっている。

*紀元 70 年にエルサレムが滅びることが決定的となった。

*そして、福音は異邦人世界に広がって行く。

2. ユダヤ人と律法

(1) 現在、MJ 神学には大きく分けて 2 つの流れがある。

①「Torah Observance」グループ（トーラー遵守派）

- ② 「New Covenant Freedom」グループ（新約による自由派）
- ③数の上で言えば、①の方が主流である。
- (2) 新約聖書は、モーセの律法がメシアの死とともに無効になったと教えている。
 - ①メシアを信じる者はモーセの律法から解放されている。
 - * ロマ 7 : 5～6、10 : 4
 - * 2 コリ 3 : 2～11
 - * ガラ 3 : 19、3 : 23～4 : 7
 - * エペ 2 : 14～15
 - * ヘブ 7 : 11～18、8 : 8～13
- (3) 新約時代の信者（MJ も異邦人も）に適用されるのは、「モーセの律法は無効になり、信者は今や新しい律法の下にいる」という原則である。
 - ①ガラテヤ 6 : 2 では「キリストの律法」
 - ②ロマ 8 : 2 では「いのちの御霊の原理」
 - ③これは、モーセの律法とは完全に別個の新しい律法である。
 - ④ここには、キリストおよび使徒たちから与えられた命令がすべて含まれている。
- (4) MJ には、モーセの律法を守る自由も、守らない自由もある。
 - ①もし守る場合、それが自らの救いや聖化に役立つと考えるなら、間違いである。
- (5) 異邦人信者には、モーセの律法は最初から無関係のものである。
- (6) MJ も異邦人信者も、今はキリストの律法の下にある。
 - ①一言で表現すると、「聖霊に導かれ、愛の人生を歩みなさい」ということ。

「サンヘドリンの前に立つパウロ」

使徒 22：30～23：11

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロを神殿で見かけたユダヤ人たちは、騒動を起こした。
- ②殺される寸前で、千人隊長の介入があった。
- ③パウロは、千人隊長の許可を得て、群衆に語りかけた。
- ④パウロが異邦人伝道について話し始めると、群衆は激怒した。
- ⑤千人隊長はパウロを拘束し、むちを打って自白させようとした。
- ⑥しかしパウロがローマ市民であることを知り、計画を変更した。

(2) アウトライン

- ①サンヘドリンの召集 (22：30)
- ②パウロの証言 (23：1～5)
- ③作戦の変更 (23：6～10)
- ④主からの励まし (23：11)

結論： 重要な3つのポイント

パウロの福音の神髄について学ぶ。

I. サンヘドリンの召集 (22：30)

1. 30 節

Act 22:30 その翌日、千人隊長は、パウロがなぜユダヤ人に告訴されたのかを確かめたいと思って、パウロの鎖を解いてやり、祭司長たちと全議会の召集を命じ、パウロを連れて行って、彼らの前に立たせた。

(1) 千人隊長は、パウロがなぜ問題の原因になっているのか理解できない。

- ①神殿内の秩序を維持することは、彼の責務であった。
- ②そこで彼は、ユダヤ議会（サンヘドリン）をアントニア要塞に召集した。
- ③サンヘドリンの議員の中には、かつてのパウロの同僚たちもいたことであろう。

*主の恵みがなければ、パウロもその中に座していたはずである。

(2) 千人隊長がサンヘドリンを召集した理由

- ①パウロの宗教的罪があるかどうか、サンヘドリンに裁かせる。
- ②問題がないと分かれば、パウロを釈放する。

③サンヘドリンが、パウロに政治的罪があると言えば、ローマの総督に裁かせる。

(3) サンヘドリンがキリスト（弟子たち）の主張を審議するのは、これで6回目。

①ヨハ 11：47～53（ラザロ蘇生の報告を受けて）

②マタ 26：57～68（イエスの裁判）

③使 4：5～22（ペテロとヨハネの尋問）

④使 5：21～40（12使徒たちの尋問）

⑤使 6：12～7：60（ステパノの尋問）

⑥使 23：1～10（パウロの尋問）

(4) 大祭司アナニヤについて

①紀元47年～59年に、大祭司であった（ローマの任命による）。

②ヨセフスは、アナニヤを軽蔑すべき人間として描いている。

＊一般の祭司に渡すべき什一献金を私物化した。

＊ローマの高官に賄賂を渡した。

＊ユダヤ・サマリア戦争の責任を問われローマに呼ばれたが、裁きは免れた。

＊目的のためには、暗殺者を用いることも厭わなかった。

＊政治的には、極めて親ローマの立場であった。

③紀元66年（この裁判から約9年後）、ユダヤ人たちによって暗殺された。

II. パウロの証言（23：1～5）

1. 1～2節

Act 23:1 パウロは議会を見つめて、こう言った。「兄弟たちよ。私は今日まで、全くきよい良心をもって、神の前に生活して来ました。」

Act 23:2 すると大祭司アナニヤは、パウロのそばに立っている者たちに、彼の口を打てと命じた。

(1) 「兄弟たちよ」は、ユダヤ人たちが使っていた正式な呼びかけの言葉である。

①パウロは、自分がユダヤ教に忠実であることを示そうとした。

(2) 「私は今日まで、全くきよい良心をもって、神の前に生活して来ました」

①自分の行為は、御心に反することでも、ユダヤ教の伝統に反することでもない。

②これは、自分には罪がないという意味ではない。

(3) 大祭司アナニヤは、そばにいた兵者たちに、パウロの口を打つように命じた。

- ①パウロが「全くきよい良心」に言及したので、大祭司が怒ったのである。
- ②彼は、パウロは有罪だという予断に基づいて行動している。
- ③彼は、サドカイ派であるが、パウロはパリサイ派である。

(4) 主イエスも同じ経験をされた（ヨハ 18：20～22）。

Joh 18:20 イエスは彼に答えられた。「わたしは世に向かって公然と話しました。わたしはユダヤ人がみな集まって来る会堂や宮で、いつも教えたのです。隠れて話したことは何もありません。

Joh 18:21 なぜ、あなたはわたしに尋ねるのですか。わたしが人々に何を話したかは、わたしから聞いた人たちに尋ねなさい。彼らならわたしが話した事がらを知っています。」

Joh 18:22 イエスがこう言われたとき、そばに立っていた役人のひとりが、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言って、平手でイエスを打った。

2. 3 節

Act 23:3 そのとき、パウロはアナニヤに向かってこう言った。「ああ、白く塗った壁。神があなたを打たれる。あなたは、律法に従って私をさばく座に着きながら、律法にそむいて、私を打てと命じるのですか。」

- (1) ユダヤ教の律法では、有罪が証明されるまでは、無罪と見なされた。
 - ①しかし、アナニヤは尋問が始まる前にパウロを打った。
 - ②パウロは、激怒した。
 - ③律法の執行者が、律法に反した行いをした（これは、偽善者の行いである）。
- (2) 「白く塗った壁」は、しっくいの上塗りされた壁である。
 - ①外側は美しいが、内側は汚れている。
 - ②エゼ 13：10～16、マタ 23：27（白く塗った墓）
- (3) 「神があなたを打たれる」
 - ①あなたが私を打ったように、神はあなたを打たれる。
 - ②この預言は、紀元 66 年に成就した。

3. 4～5 節

Act 23:4 するとそばに立っている者たちが、「あなたは神の大祭司をののしるのか」と言ったので、

Act 23:5 パウロが言った。「兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、『あなたの民の指導者を悪く言ってはいけない』と書いてあります。」

(1) 議員たちは、大祭司の命令には驚かなかったが、パウロの言葉には驚いた。

①彼らは、「あなたは神の大祭司をののしるのか」と言った。

(2) パウロは、彼を打つように命じた人物が、大祭司であることを知らなかった。

①パウロは、エルサレムを 20 年以上離れていた。

②アナニヤは、大祭司の衣装を着用していなかった（議会の召集は緊急だった）。

③パウロが皮肉を言っている可能性はある。

(3) 「確かに、『あなたの民の指導者を悪く言ってはいけない』と書いてあります」

①出 22 : 28 からの引用

②律法は、個人的な資質とは無関係に、大祭司の職を敬うように命じている。

Ⅲ. 作戦の変更 (23 : 6~10)

1. 6 節

Act 23:6 しかし、パウロは、彼らの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのを見て取って、議会の中でこう叫んだ。「兄弟たち。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」

(1) 正当な尋問を受けられないと判断したパウロは、作戦を変更する。

①サンヘドリンは、サドカイ派の議員と、パリサイ人の議員から成っていた。

②両者は、死者の復活に関して意見が異なっていた（百年以上続く論争）。

(2) パウロは、自分が根っからのパリサイ人であることを宣言する。

①それゆえ、「死者の復活という望み」は、パウロの宣教の土台であった。

②メシアは、死者の中からの復活によって、イスラエルを救われる。

③この確信は、ヘブル語聖書（旧約聖書）の預言に基づくものである。

2. 7~9 節

Act 23:7 彼がこう言うと、パリサイ人とサドカイ人との間に意見の衝突が起こり、議会は二つに割れた。

Act 23:8 サドカイ人は、復活はなく、御使いも霊もないと言い、パリサイ人は、どちらもあると言っていたからである。

Act 23:9 騒ぎがいよいよ大きくなり、パリサイ派のある律法学者たちが立ち上がって激しく論じて、「私たちは、この人に何の悪い点も見いださない。もしかしたら、霊か御使いかが、彼に語りかけたのかもしれない」と言った。

(1) サンヘドリンが2つに割れた。

- ①サドカイ人は、復活、天使、悪霊などを信じなかった。
- ②ユダヤ人の議論は、騒々しいものである。
- ③この状態では、パウロに対する尋問を継続することはできない。

(2) パリサイ派は、パウロの側に付いた。

- ①パウロが見た2つの幻（ダマスコ途上、神殿の中）を認め始めた。

4. 10 節

Act 23:10 論争がますます激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵隊に、下に降りて行って、パウロを彼らの中から力づくで引き出し、兵営に連れて来るように命じた。

(1) 千人隊長は、ユダヤ人たちが騒ぎを起こしている理由が、分らない。

- ①このままでは、パウロの命が危ない。
- ②そこで千人隊長は、パウロを保護し、兵営に連行するように命じた。
- ③サンヘドリンの議論は、そのまま続けさせた。

IV. 主からの励まし (23 : 11)

1. 11 節

Act 23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない」と言われた。

(1) 主からの幻は、例外なしにパウロが危機的状況に置かれた時に与えられている。

- ①使 9 : 5、22 : 17～21、18 : 9～10、23 : 11

(2) パウロは、この状況からどうしたら抜け出せるか思案していた。

- ①その夜、主がパウロのそばに立った。

(3) 主からの励ましのことば

- ①勇気を出しなさい。
- ②あなたはエルサレムで証しした。

*これは、おほめの言葉である。

- ③そのように、ローマでも証ししなければならない。

*ローマでの伝道に関する使命意識が生まれた（パウロの忍耐心の源泉）。

結論：重要な3つのポイント

- 1. パウロは、自分はパリサイ人であるという自己認識を持っていた。

- (1) イエスを信じて 20 年以上経っていたが、自分はパリサイ人だと考えていた。
- (2) パリサイ派の基本的な教理を保持していたからである。
 - ①死者の復活、②魂の不滅、③永遠の報酬と裁き、④天使と悪霊の存在、
 - ⑤神の主権（人間の責務とのバランス）、⑥ヘブル語聖書（旧約聖書）の権威
- (3) イエス・キリストを信じることは、パリサイ派の教理と矛盾するものではない。

2. パリサイ人はクリスチャンになれるが、サドカイ人はそうではない。

- (1) パリサイ人は、キリストを信じてからも、パリサイ人に留まることができる。
 - ①律法に関する認識は、当然のことながら変化せざるを得ない。
- (2) サドカイ人は、その信仰を変えなければ、クリスチャンになることはできない。
 - ①クリスチャンは、死者の復活を否定できない。
 - ②クリスチャンは、魂の不滅を否定できない。
 - ③クリスチャンは、永遠の報酬と裁きを否定できない。
 - ④クリスチャンは、天使と悪霊の存在を否定できない。
 - ⑤また、トーラーだけを認め、預言者を否定するようなことは出来ない。

3. パウロが伝える福音の神髄は、キリストの復活である。

- (1) サンヘドリンの前で証言するのは、これが最後であるという認識があった。
 - ①パウロは、最も重要なメッセージを伝えた。
- (2) イエスが復活したという歴史的事実こそが、キリスト教の土台である。
 - ①イエスこそヘブル語聖書が約束していたメシアであることが、証明された。
- (3) アグリッパ王への弁明
 - ①使 26 : 6～8

Act 26:6 そして今、神が私たちの父祖たちに約束されたものを待ち望んでいることで、私は裁判を受けているのです。

Act 26:7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです。

Act 26:8 神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。

②使 26 : 22～23

Act 26:22 こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。

Act 26:23 すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人にと最初に光を宣べ伝える、ということです。」

「パウロ殺害の陰謀」

使徒 23：12～30

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①千人隊長は、なぜパウロが騒動の原因になっているのかを知ろうとした。
- ②そこで彼は、議会を招集し、パウロの主張を吟味させた。
- ③パウロは、死者の復活を取り上げ、サドカイ人とパリサイ人を対立させた。
- ④千人隊長は、パウロを議会から力づくで引き出した。
- ⑤その夜、パウロは主の幻を見た。

(2) アウトライン

- ①パウロ殺害の陰謀（12～15 節）
- ②陰謀の発覚（16～21 節）
- ③千人隊長の対応（22～24 節）
- ④総督への手紙（25～30 節）

結論： 神の守りの御手

神の守りの御手について学ぶ。

I. パウロ殺害の陰謀（12～15 節）

1. 12～13 節

Act 23:12 夜が明けると、ユダヤ人たちは徒党を組み、パウロを殺してしまうまでは飲み食いしないと誓い合った。

Act 23:13 この陰謀に加わった者は、四十人以上であった。

(1) 翌朝、ユダヤ人たちは、パウロ殺害の陰謀を企てた。

- ①40 人以上がこの陰謀に荷担した。
- ②律法に違反した者を、裁判を経ずに罰することは、珍しくなかった。
- ③ヨハ 16：2

Joh 16:2 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。

(2) 彼らは、自らを厳粛な誓約の下に置いた（ギリシア語の「アナテマティゾウ」）。

- ①「誓い合った」（新改訳）
- ②「呪いをかけて誓った」（新改訳 2017）

③「誓いを立てた」（新共同訳）

④「誓い合った」（口語訳）

(3) 彼らは、誓約を破ったら呪われてもよいという誓約をしたのである。

①ペテロの誓い（マタ 26：74）

Mat 26:74 すると彼は、「そんな人は知らない」と言って、のろいをかけて誓い始めた。するとすぐに、鶏が鳴いた。

(4) この陰謀が失敗したらどうなるのか。

①贖いのいけにえを神殿で捧げれば、誓約から解かれる。

②状況が変化した場合は、誓約から解かれる。

③間違った情報に基づいて誓約した場合は、誓約から解かれる。

④一時的な感情に基づいて誓約した場合は、誓約から解かれる。

2. 14～15 節

Act 23:14 彼らは、祭司長たち、長老たちのところに行って、こう言った。「私たちは、パウロを殺すまでは何も食べない、と堅く誓い合いました。」

Act 23:15 そこで、今あなたがたは議会と組んで、パウロのことをもっと詳しく調べるふりをして、彼をあなたがたのところに連れて来るように千人隊長に願い出てください。私たちのほうでは、彼がそこに近づく前に殺す手はずにしています。」

(1) 彼らは、指導者たち（祭司長たち、長老たち）のところに行った。

①そして、呪いをかけた誓いを立てたと告げた。

(2) 彼らは、サンヘドリンを陰謀に巻き込もうとした。

①アントニア要塞で保護されている限り、パウロを襲う方法はない。

②神殿内の部屋で議会を開き、パウロをもっと詳しく調べるふりをする。

③千人隊長に、パウロをアントニア要塞から神殿に連れて来るように頼む。

④移動距離はほんのわずかであるが、途中で待ち伏せして、パウロを殺す。

(3) 彼らは、ローマ兵（護衛兵）たちとの衝突を予期していた。

①自分たちも、そのほとんどが殺されるであろうことを、覚悟していた。

②それほどに、パウロ殺害に情熱を燃やしていた。

II. 陰謀の発覚（16～21 節）

1. 16～17 節

Act 23:16 ところが、パウロの姉妹の子が、この待ち伏せのことを耳にし、兵営に入ってパウロにそれを知らせた。

Act 23:17 そこでパウロは、百人隊長のひとりを呼んで、「この青年を千人隊長のところに連れて行ってください。お伝えすることがありますから」と言った。

(1) パウロの家族（親戚）への言及は、新約聖書ではここだけである。

①パウロの姉妹の子（パウロの甥）が、パウロに対する陰謀があることを聞いた。

②どのようにして知ったのかは分からない。考えられる可能性はいくつかある。

＊熱心党の一員だったので、知った。

＊陰謀について話されているのを、偶然耳にした。

＊家族の政治的人脈を通して知った。

(2) 彼は、待ち伏せのことをパウロに知らせた。

①パウロはローマ市民なので、丁重な扱いを受けていた。

②家族や親戚を、アントニア要塞に迎えることができた。

③さらに、百人隊長に助けを依頼することもできた。

2. 18～19 節

Act 23:18 百人隊長は、彼を連れて千人隊長のもとに行き、「囚人のパウロが私を呼んで、この青年があなたにお話しすることがあるので、あなたのところに連れて行くようにと頼みました」と言った。

Act 23:19 千人隊長は彼の手を取り、だれもない所に連れて行って、「私に伝えたいことというのとは何か」と尋ねた。

(1) 百人隊長は、パウロの甥を千人隊長のところに連れて行った。

①千人隊長は、誰もいない所にパウロの甥を連れて行き、話を聞いた。

②できる限り、パウロに優しくしようとしている。

(2) この甥は、何歳くらいなのか。

①青年は、ギリシア語の「ネアニアス」である。

②通常は、20 代、30 代の男性を指すが、それよりも若い場合もある。

③千人隊長は、彼の手を取っている。彼は、まだ子どもである。

3. 20～21 節

Act 23:20 すると彼はこう言った。「ユダヤ人たちは、パウロについてもっと詳しく調べようとしているかに見せかけて、あす、議会にパウロを連れて来てくださるように、あなたにお願い

いすることを申し合わせました。

Act 23:21 どうか、彼らの願いを聞き入れないでください。四十人以上の者が、パウロを殺すまでは飲み食いしない、と誓い合って、彼を待ち伏せしているのです。今、彼らは手はずを整えて、あなたの承諾を待っています。」

(1) この子は、ユダヤ人たちの陰謀を詳しく告げた。

①また、彼らの願いを聞き入れないで欲しいと懇願した。

Ⅲ. 千人隊長の対応（22～24 節）

1. 22 節

Act 23:22 そこで千人隊長は、「このことを私に知らせたことは、だれにも漏らすな」と命じて、その青年を帰らせた。

(1) 千人隊長は、この面会について誰にも話さないように命じ、この子を帰らせた。

①千人隊長は、すぐに行動を起こす必要があると感じた。

②大祭司アナニヤが残虐な人物であることを知っていた。

③エルサレムにいる限り、いつかパウロは殺されるだろう。

④自分の任期中にローマ市民が殺されるのは、決して好ましいことではない。

2. 23～24 節

Act 23:23 そしてふたりの百人隊長を呼び、「今夜九時、カイザリヤに向けて出発できるように、歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人を整えよ」と言いつけた。

Act 23:24 また、パウロを乗せて無事に総督ペリクスのもとに送り届けるように、馬の用意もさせた。

(1) 彼は、パウロをカイザリヤに移動させることにした。

①カイザリヤは、総督が滞在する町である。

②当時の総督は、ペリクスであった（ポンテオ・ピラトが就いていた役職）。

(2) 470 人から成る衛兵隊が結成された。

①歩兵 200 人、②騎兵 70 人、③槍兵 200 人。

*この人数は、アントニア要塞に駐留している兵士たちの約半分である。

②夜 9 時に、パウロはエルサレムを出発した。

*そして、2 度とエルサレムに戻ることはなかった。

③千人隊長は、パウロに馬の用意までした。

IV. 総督への手紙 (25～30 節)

1. 25～26 節

Act 23:25 そして、次のような文面の手紙を書いた。

Act 23:26 「クラウドオ・ルシヤ、つつしんで総督ペリクス閣下にごあいさつ申し上げます。

(1) 千人隊長の名前は、クラウドオ・ルシヤである。

①クラウドオ帝の治世に、ローマの市民権を金で買った。

(2) 手紙の宛先は、総督ペリクスである。

①「閣下」は、「クラティストス」で、正式なローマの称号である。

*ルカ 1:3 で同じ言葉が使われている。「尊敬するテオピロ殿」

②総督ペリクスが、23 章後半から 24 章において主要な役割を演じる。

③彼は、紀元 52 年から 59 年までユダヤの総督であった。

④兄パッラスは、クラウドオ帝の下で権勢を誇った解放奴隷であった。

⑤ペリクス自身も、兄と同様、クラウドオ帝の母の解放奴隷だった。

⑥ペリクスがユダヤ総督になったのは、解放奴隷を地方官に任命するというクラウドオ帝の政策によるものである。

⑦彼は、武力によってユダヤの治安維持を図ろうとしたが、過激な反ローマ主義者シカリ党の徹底的な反抗に会い、その統治は混乱続きのものとなった。

⑧カイザリヤで混乱が生じた時、彼は多数のユダヤ人を殺害した。

⑨そのため、ユダヤ人の代表たちはペリクスを訴えるためにローマに行った。

⑩この時は、兄パッラスの介入によって、処罰を免れた。

⑪ネロ帝は、ペリクスに代えてフェストをユダヤの総督とした。

⑫タキトゥスの『歴史』には、「ペリクスの統治は、奴隷の心情で王権を行使したものであった」と書かれている。

⑬パウロはカイザリヤで、この狡猾で人格下劣な総督と対面することになる。

2. 27 節

Act 23:27 この者が、ユダヤ人に捕らえられ、まさに殺されようとしていたとき、彼がローマ市民であることを知りましたので、私は兵隊を率いて行って、彼を助け出しました。

(1) 半分嘘の手紙

①パウロがローマ市民であることを知った。→兵隊を率いて行って、彼を助けた。

②パウロを逮捕した。→その後で、彼がローマ市民であることを知った。

③パウロをムチで打とうとしたことは書いていない。

3. 28～30 節

Act 23:28 それから、どんな理由で彼が訴えられたかを知ろうと思い、彼をユダヤ人の議会に出頭させました。

Act 23:29 その結果、彼が訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためで、死刑や投獄に当たる罪はないことがわかりました。

Act 23:30 しかし、この者に対する陰謀があるという情報を得ましたので、私はただちに彼を閣下のもとにお送りし、訴える者たちには、閣下の前で彼のことを訴えるようにと言いつけておきました。」

(1) 千人隊長の判断

- ①混乱の原因は、ユダヤ人の律法に関する問題である。
- ②死刑や投獄に当たる罪はない。

(2) 陰謀があるという情報を得たので、パウロを閣下のもとにお送りする。

- ①ユダヤ人たちが訴えて来ると思うので、よろしく願いたい。

結論：神の守りの御手

(1) 使 23 : 11

Act 23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない」と言われた。

(2) 神が働かれる方法は、人間が期待する方法とは異なる。

1. ローマの市民権

- (1) パウロがローマ市民でなければ、エルサレムで殺害されていたであろう。
- (2) ローマ市民であるがゆえに、保護された。
- (3) 甥の訪問を受けることができた。
- (4) 百人隊長に、甥を千人隊長のもとに案内するように依頼することができた。
- (ILL) 医学的治療を受けることを禁止された信者の例

2. 子ども

- (1) パウロの甥は、すでに確認したように子どもであった。
- (2) 主イエスは、子どもを高く評価された（マタ 18 : 2～7）。
- (3) 5つのパンと2匹の魚を差し出したのは、子どもであった（ヨハ 6 : 8～9）。

3. ローマ兵

- (1) パウロを敵から救い、カイザリヤに運んだのはローマ兵たちであった。
- (2) 神の方法は、人間の方法とは異なる。

「カイザリヤ到着」

使徒 23：31～35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロ殺害の陰謀が発覚した。
- ②このことを千人隊長に知らせたのは、パウロの甥であった。
- ③千人隊長は、直ちにパウロをカイザリヤに移送することにした。
- ④歩兵 200 人、騎兵 70 人、槍兵 200 人を護衛部隊とした。
- ⑤パウロのために馬を用意した。
- ⑥千人隊長は、総督宛の手紙を用意した。
- ⑦エルサレム出発は、ローマに向かう旅の始まりであった。

(2) アウトライン

- ①エルサレムからカイザリヤへ（31～33 節）
- ②総督による予備審問（34～35 節）
- ③カイザリヤでの 2 年間

結論：神の時

神の時について学ぶ。

I. エルサレムからカイザリヤへ（31～33 節）

1. 31～32 節

Act 23:31 そこで兵士たちは、命じられたとおりにパウロを引き取り、夜中にアンテパトリスまで連れて行き、

Act 23:32 翌日、騎兵たちにパウロの護送を任せて、兵営に帰った。

(1) エルサレムからアンテパトリスまで

- ①アンテパトリスは、エルサレムから約 60 キロ北西にある町である。
- ②かつてはクファル・サバと呼ばれた。
- ③ヘロデ大王が自分の父に敬意を表して、アンテパトリスと命名した。
- ④現在は、クファル・サバになっている。
- ⑤470 人の兵士たちが、夜を徹して移動した。

＊ユダの山地→シェフェラー（低地）→アンテパトリス

＊途中森林地帯を通過するので、伏兵に襲われる危険性があった。

- ⑥一行は、大急ぎで移動し、明るくなる頃にはアンテパトリスに着いた。

(2) アンテパトリスからカイザリヤまで

- ①カイザリヤまでは約 45 キロの道のりである。
- ②平地が続く、伏兵に襲われる危険性もない。
 - *さらに、ユダヤ人人口が少ない地域に入っている。
- ③400 人の兵士たちはエルサレムの兵営に帰って行った。
- ④残った 70 人の騎兵たちが、パウロをカイザリヤまで送り届けた。

2. 33 節

Act 23:33 騎兵たちは、カイザリヤに着き、総督に手紙を手渡し、パウロを引き合わせた。

(1) 騎兵たちは、任務を果たした。

- ①カイザリヤに着いた。
- ②総督に千人隊長からの手紙を渡した。
- ③総督にパウロを引き渡した。

(2) 当時の総督は、アントニウス・ペリクスである。

- ①彼は、紀元 52 年から 59 年までユダヤの総督であった。
- ②ポンテオ・ピラトは、紀元 26 年から 36 年まで、同じ地位に就いていた。
- ③彼は、解放奴隷であった。
 - *クラウデオ帝の母アントニアの力で解放された。
- ④彼は、解放奴隷がローマ属州の総督となった最初の人物である。
 - *兄パッラスの援助（クラウデオ帝の下で権勢を誇った解放奴隷）
 - *目的のためには手段を選ばないという政治手法
 - *3 回にわたる政略結婚
- ⑤彼は、武力によってユダヤの治安維持を図ろうとした。
- ⑥過激な反ローマ主義者シカリ党には厳しく対応した。
- ⑦「ペリクスの統治は、奴隷の心情で王権を行使したものであった」(タキトゥス)

II. 総督による予備審問（34～35 節）

1. 34 節

Act 23:34 総督は手紙を読んでから、パウロに、どの州の者かと尋ね、キリキヤの出であることを知って、

(1) 総督は、パウロの出身地を尋ねた。

- ①その出身地に別の統治者がいる場合は、その者に裁判の優先権がある。

②ルカ 23 : 6～7

Luk 23:6 それを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ねて、

Luk 23:7 ヘロデの支配下にあるとわかると、イエスをヘロデのところに送った。ヘロデもそのころエルサレムにいたからである。

*ピラトは、ガリラヤの国主ヘロデ・アンティパスに裁判を委ねた。

*ヘロデがそれを拒否したので、ピラトが判決を出すはめになった。

(2) パウロはキリキヤの出である。

①そこには別の統治者がいないので、ペリクスが裁判を担当することになった。

②訴える者がいないと裁判にならない。

2. 35 節

Act 23:35 「あなたを訴える者が来てから、よく聞くことにしよう」と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っておくように命じた。

(1) 訴えるユダヤ人たちが来るまで、パウロはヘロデの官邸に収監された。

①「ヘロデの官邸」とは、ヘロデ大王が建設した建物である。

②そこには、いくつかの監獄が設置されていた。

③パウロの生活は、かなり快適なものであったと思われる。

*ローマ市民であった。

*罪を犯したかどで正式に訴えられているわけではない。

(2) ペリクスの頭の中にあるのは、邪悪な思いである。

①いかにしてユダヤ人の機嫌取りをするか。

②いかにしてパウロから賄賂をもらうか。

(3) 使 24 : 1

Act 24:1 五日の後、大祭司アナニヤは、数人の長老およびテルトロという弁護士といっしょに下って来て、パウロを総督に訴えた。

Ⅲ. カイザリヤでの2年間

(1) パウロは、ここから約2年間カイザリヤに収監されることになる。

①2人の総督と1人の王の前で弁明する。

②使 9 : 15 の成就である。

Act 9:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、

イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。

(2) ペリクスによる裁判

①3 区分

＊パウロに対するユダヤ人たちの訴え（24：1～9）

＊訴えに対するパウロの弁明（24：10～21）

＊ペリクスの応答（24：22～27）

②それぞれにほぼ均等なスペースが割かれている。

③ルカの意図は、パウロに有罪宣言を出せなかったことを示すことにある。

＊ユダヤ人たちの巧妙な訴えがあった。

＊ペリクスは邪悪な総督であった。

(3) ルカはこのパターンを 3 回繰り返している。

①ペリクス、フェスト、ヘロデ・アグリッパⅡ世

(4) 3 回の裁判を通してルカが示そうとしたこと

①キリスト教は、政治運動とは無関係である。

②ユダヤ教がキリスト教を迫害する理由は、明白である。

＊ユダヤ教の希望は復活のイエスにおいて成就したとのキリスト教の主張

結論：神の時

1. サラ

(1) 神の計画は、年老いた夫婦から息子が誕生するというものであった。

(2) しかし、サラには神の時を待つ忍耐力がなかった。

①彼女は、「神の前を歩く女」になった。

(3) 彼女は、女奴隷ハガルによって子を得ようとした。

①当時の習慣からすると不道德なことではなかった。

(4) イシュマエルの子孫とイサクの子孫の葛藤は、今日まで約 4000 年続いている。

2. ヨセフ

(1) ヨセフは、逆境の中でも神を称えることができた人物である。

(2) 彼は、兄たちの手で奴隷に売られた。

(3) パロの廷臣で侍従長のポティファルのもとに住むことになった。

(4) ポティファルの妻から濡れ衣を着せられ、監獄に入れられた。

- (5) エジプト王の献酌官長と調理官長の二人に会うことになった。
- (6) 献酌官長と調理官長は、獄中で不吉な夢を見た。
- (7) ヨセフは2人の夢の解き明かしをした。
 - * 献酌官長には、良い解き明かしをした。
 - * 調理官長には、悪い解き明かしをした。
- (8) この献酌官長は、ヨセフのことを全く忘れていた。
- (9) それから2年後、ファラオは夢を見た。

3. モーセ

- (1) エジプトでの40年間
- (2) ミディアンでの40年間
- (3) 出エジプトの40年間

4. パウロ

- (1) エルサレムで2回証言をした。
 - ①ユダヤ人の群衆に対して
 - ②サンヘドリンに対して
- (2) カイザリヤで3回証言をした。
 - ①パウロ vs. ペリクス
 - ②パウロ vs. フェスト
 - ③パウロ vs. ヘロデ・アグリッパⅡ世
- (3) カイザリヤでの2年間は、ローマという大舞台を用意する期間であった。
 - ①神は眠ってはおられない。
 - ②ヘブ 10：36～39

Heb 10:36 あなたがたが神のみところを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。

Heb 10:37 「もうしばらくすれば、／来るべき方が来られる。おそくなることはない。

Heb 10:38 わたしの義人は信仰によって生きる。／もし、恐れ退くなら、／わたしのところは彼を喜ばない。」

Heb 10:39 私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

「ペリクスの前に立つパウロ」

使徒 24 : 1～23

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロ殺害の陰謀が発覚した。
- ②千人隊長は、直ちにパウロをカイザリヤに移送した。
- ③千人隊長は、総督ペリクス宛の手紙を用意した。
- ④ペリクスは、パウロを留置しておくように命じた。
- ⑤使 23 : 34～35

Act 23:34 総督は手紙を読んでから、パウロに、どの州の者かと尋ね、キリキヤの出であることを知って、

Act 23:35 「あなたを訴える者が来てから、よく聞くことにしよう」と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っておくように命じた。

(2) アウトライン

- ①パウロに対するユダヤ人たちの訴え (24 : 1～9)
- ②訴えに対するパウロの弁明 (24 : 10～21)
- ③ペリクスの応答 (24 : 22～23)

結論：復活

ペリクスの裁判について学ぶ。

I. パウロに対するユダヤ人たちの訴え (24 : 1～9)

1. 1～2 節 a

Act 24:1 五日の後、大祭司アナニヤは、数人の長老およびテルトロという弁護士といっしょに下って来て、パウロを総督に訴えた。

Act 24:2a パウロが呼び出されると、テルトロが訴えを始めてこう言った。

(1) ユダヤ人たちのパウロに対する憎しみがいかに激しかったかが分かる。

- ①5 日後にやって来た (パウロがエルサレムを発ってから 5 日後)。
- ②大祭司アナニヤ自身と、議員たちがやって来た。
- ③弁護士のテルトロを伴ってきた。

*テルトロはラテン名である。

*パウロのようにヘレニストのユダヤ人である可能性が大である。

*彼は、パウロを総督に訴えるために雇われた。

*弁護士というギリシア語は、「レトロス」である。雄弁家を意味する。

④最初のパウロを捕えたエペソから来たユダヤ人たちはいなかった。

⑤また、陰謀を企てた40人のユダヤ人たちもいなかった。

2. 2b～4節

Act 24:2b 「ペリクス閣下。閣下のおかげで、私たちはすばらしい平和を与えられ、また、閣下のご配慮で、この国の改革が進行しておりますが、

Act 24:3 その事実をあらゆる面において、また至る所で認めて、私たちは心から感謝しております。

Act 24:4 さて、あまりご迷惑をおかけしないように、ごく手短に申し上げますから、ご寛容をもって聞きくださるようお願いいたします。

(1) テルトロはペリクスに対してお世辞（へつらい）の言葉を使った。

①「閣下」（クラティストス）は、ペリクスよりも高位の人に使うタイトルである。

*「尊敬するテオピロ殿」（ルカ1:3）

②「すばらしい平和を与えられ」は、半分事実である。

*しかし、その平和は恐怖政治の結果である。

③「私たちは心から感謝しております」は、お世辞である。

*その平和をパウロが乱しているという訴えをするための準備である。

(2) 「ごく手短に申し上げますから、」

①当時の話し手も、話は短く終わることを約束したが、長くなるが多かった。

②今も、その状況は変わらない。

3. 5～9節

Act 24:5 この男は、まるでペストのような存在で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者であり、ナザレ人という一派の首領でございます。

Act 24:6 この男は宮さえもけがそうとしましたので、私たちは彼を捕らえました。

Act 24:8 閣下ご自身で、これらすべてのことについて彼をお調べくださいますなら、私たちが彼を訴えております事がらを、おわかりになっていただけるはずです。」

Act 24:9 ユダヤ人たちも、この訴えに同調し、全くそのとおりだと言った。

(1) 3つの訴えがなされた（すべて政治的な意味を持っている）。

①世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている。

*ペストのような存在

②ナザレ人という一派（異端）の首領である。

*ユダヤ教はローマの公認宗教であった。

＊「ナザレ人という一派」という用語を使った。

＊パウロの信仰はユダヤ教とは別のもので、異端であるとの印象を与えた。

③宮さえもけがそうとした。

＊「ギリシヤ人を宮の中に連れ込んで、」（使 21:28）というのが騒動の原因。

＊ここでは、その説明が抜けている。

＊ローマ帝国は、神殿を汚した者の死刑を認めていた。

＊それゆえ、パウロを死刑に処すべきであるという理屈が成り立つ。

(2) 虚偽の報告

①「私たちは彼を捕らえました」は、嘘である。

＊暴動を起こしたのは、ユダヤ人たちである。

②この説明は千人隊長の手紙の内容と合致するので、総督は納得したと思われる。

(3) イエスもまた同様の訴えを受けた（ルカ 23:2）。

Luk 23:2 そしてイエスについて訴え始めた。彼らは言った。「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」

(4) 使 24:6b~8a は、信頼できる写本にはない。

「そして、私どもの律法によって裁こうとしたところ、千人隊長リシアがやって来て、この男を無理やり私どもの手から引き離し、告発人たちには、閣下のところに来るようにと命じました」（新共同訳）

(5) 同席していたユダヤ人は、訴えの内容に同意した。

①彼らは、ペリクスが直ちにパウロを処刑することを期待した。

②ペリクスは、ローマに敵対する者たちを平気で十字架に付けていた。

II. 訴えに対するパウロの弁明（24:10~21）

1. 10 節

Act 24:10 そのとき、総督がパウロに、話すようにと合図したので、パウロはこう答えた。／「閣下が多年に渡り、この民の裁判をつかさどる方であることを存じておりますので、私は喜んで弁明いたします。

(1) パウロは、テルトロよりも誠実で真実な言葉を語った。

①ペリクスは5年以上もユダヤ総督を務めている。

②それゆえ、ユダヤ人のことに関して的確な判断をしていただけるはずである。

③これは、テルトロのイントロダクションよりも短い。

2. 11～13 節

Act 24:11 お調べになればわかることですが、私が礼拝のためにエルサレムに上って来てから、まだ十二日しかたっておりません。

Act 24:12 そして、宮でも会堂でも、また市内でも、私がだれかと論争したり、群衆を騒がせたりするのを見た者はありません。

Act 24:13 いま私を訴えていることについて、彼らは証拠をあげることができないはずで

(1) 1 番目の訴えに対する反論（世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている）

①エルサレムに上って来てから、まだ 12 日しか経っていない。

②ペストのような存在になる時間的余裕はなかった。

③自分は、だれかと論争したり、群衆を騒がせたりしたことはない。

④訴えている者たちは、証拠を上げることができないはずである。

3. 14～16 節

Act 24:14 しかし、私は、彼らが異端と呼んでいるこの道に従って、私たちの先祖の神に仕えていることを、閣下の前で承認いたします。私は、律法にかなうことと、預言者たちが書いていることとを全部信じています。

Act 24:15 また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあって抱いております。

Act 24:16 そのために、私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています。

(1) 2 番目の訴えに対する反論（ナザレ人という一派の首領である）

①自分が信じている内容は、異端ではなく、「この道」である。

②その信仰は、旧約聖書から出たものであり、ユダヤ教と調和する。

＊律法と預言者を全部信じている。

③復活の希望を抱いている。

④それゆえ、良心を保つように最善を尽くしている。

(2) 大祭司アナニヤはサドカイ人であるので、復活を信じていなかった。

①パウロが訴えられているのは、宗教的な理由である。

＊パウロとアナニヤは、復活に関して意見が異なる。

4. 17～18 節

Act 24:17 さて私は、同胞に対して施しをし、また供え物をささげるために、幾年ぶりかで帰って来ました。

Act 24:18 その供え物のことで私は清めを受けて宮の中にいたのを彼らに見られたのですが、別に群衆もおらず、騒ぎありませんでした。ただアジアから来た幾人かのユダヤ人がおりました。

(1) 3番目の訴えに対する反論（宮さえもけがそうとした）

- ①エルサレムに上ったのは、同胞に施しをし、供え物をささげるためである。
- ②自分は神殿で騒ぎを起こしていない。
- ③異邦人を神殿に連れ込んでいない。
- ④アジアから来た幾人かのユダヤ人が自分といっしょにいた。

5. 19～21 節

Act 24:19 もし彼らに、私について何か非難したいことがあるなら、自分で閣下の前に来て訴えるべきです。

Act 24:20 でなければ、今ここにいる人々に、議会の前に立っていたときの私にどんな不正を見つけたかを言わせてください。

Act 24:21 彼らの中に立っていたとき、私はただ一言、『死者の復活のことで、私はきょう、あなたがたの前でさばかれているのです』と叫んだにすぎません。」

(1) 最初に神殿でパウロを捕えた者たちは、ここにはいない。

- ①彼ら自身が総督の前で訴えるべきである。
- ②ローマ法では、途中で訴えを取り下げる者は厳しく罰せられた。
- ③彼らがいないということは、パウロを訴える理由がないということである。

(2) 今パウロを訴えている者たちが、パウロの不正を証明すべきである。

①彼らは、サンヘドリンでの裁判の際に、そこにいた。

＊大祭司、サドカイ人、パリサイ人

- ②パウロは、一言叫んだだけである。
- ③「死者の復活のことで、私はきょう、あなたがたの前でさばかれているのです」
- ④パウロは、弁明しながら伝道している。

(3) ペリクスは、微妙な立場に置かれた。

- ①ユダヤ人たちの神学論争に介入せねばならない。
- ②しかし、ユダヤ人たちの機嫌を損ねたくない。

Ⅲ. ペリクスの応答（24：22～23）

1. 22～23 節

Act 24:22 しかしペリクスは、この道について相当詳しい知識を持っていたので、「千人隊長ルシヤが下って来るとき、あなたがたの事件を解決することにしよう」と言って、裁判を延期した。

Act 24:23 そして百人隊長に、パウロを監禁するように命じたが、ある程度の自由を与え、友人たちが世話をすることを許した。

(1) ペリクスは、「この道」について相当詳しい知識を持っていた。

①ユダヤ人の妻ドルシラが情報源

＊ヘロデ・アグリッパ I 世の娘

②ユダヤから来たローマ人やユダヤ人も情報源

③ローマ帝国内の他の地域に住む人たちも情報源

(2) ペリクスは、ユダヤ人たちとの平和を維持しようとした。

①千人隊長が来るまで裁判を延期するという。

＊しかし、ペリクスには千人隊長をカイザリヤに呼ぶつもりはない。

＊千人隊長の手紙で、パウロが無罪であることを知っていた。

②裁判は無期限に延期された。

③ここから 2 年間の拘留生活が始まる。

(3) パウロは、ユダヤ人たちから隔離された。

①パウロには、ある程度の自由が与えられた。

②友人たちが世話をした。

＊アリストアルコス、ルカ、伝道者ピリポなどであろう。

結論：復活

Act 24:14 しかし、私は、彼らが異端と呼んでいるこの道に従って、私たちの先祖の神に仕えていることを、閣下の前で承認いたします。私は、律法にかなうことと、預言者たちが書いていることとを全部信じています。

Act 24:15 また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあって抱いております。

Act 24:16 そのため、私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています。

1. パウロの弁明の中心は、復活である。

- (1) 復活は、旧約聖書（律法と預言者）に預言されている真理である。
- (2) 復活をどのように理解しているかで、その人の生き方が決まる。
- (3) パウロは、良心に恥じないように歩んでいる。
- (4) キリスト教は、復活信仰である。
 - ①キリストは、私の罪のために死なれたのか。
 - ②キリストは、復活されたのか。

2. パウロは、義人の復活と悪人の復活を信じていた。

- (1) パウロが義人と悪人の復活に言及するのは、新約聖書ではここだけである。
- (2) 義人と悪人の復活を教える聖句
 - ①ダニ 12 : 2

Dan 12:2 地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。

②ヨハ 5 : 28～29

Joh 5:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。

Joh 5:29 善を行つた者は、よみがえっていのちを受け、悪を行つた者は、よみがえってさばきを受けるのです。

3. 聖書は、第一の復活と第二の復活を区別している。

- (1) 第一の復活（黙 20 : 5～6）
 - ①第一の復活に与るのは、信者だけである。
 - ②第一の復活には順番がある。
 - *初穂としてのキリストの復活
 - *携挙の時点での教会の聖徒たちの復活
 - *千年王国開始時点での旧約の聖徒たちと大患難時代の殉教者たちの復活
 - ③「この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる」
 - ④第二の死とは、永遠の滅びのことである。
 - ⑤キリストを信じる者は、肉体の死は経験するが、永遠の滅びに入ることはない。
- (2) 第二の復活（黙 20 : 13～15）
 - ①信者でない人々の復活は、第二の復活と呼ばれる。
 - ②第二の復活は千年王国の終わりに起こる。
 - ③第一の復活と第二の復活の間には、千年間の隔りがある。

④第二の復活も、順を追って起こる。

＊反キリストの復活

＊白い御座のさばきの前のあらゆる時代の未信者たちの復活

＊反キリストの復活と未信者たちの復活の間には、千年間の隔りがある。

⑤第一の復活は、神からの栄誉と祝福を受けるためのものである。

⑥第二の復活は、神からの裁きを受けるためのものである。

⑦未信者の肉体とたましいとが合体して白い御座のさばきを受ける。

⑧キリストの贖いのわざを受け入れるかどうか、その人の永遠の運命を変える。

「ペリクスへの伝道」

使徒 24：24～27

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①ユダヤ総督ペリクスの前でパウロの裁判が行われた。

②前回学んだ内容

＊パウロに対するユダヤ人たちの訴え（24：1～9）

＊訴えに対するパウロの弁明（24：10～21）

＊ペリクスの応答（24：22～23）

③ペリクスは、判断を先延ばしにした（24：22～23）

Act 24:22 しかしペリクスは、この道について相当詳しい知識を持っていたので、「千人隊長ルシヤが下って来るとき、あなたがたの事件を解決することにしよう」と言って、裁判を延期した。

Act 24:23 そして百人隊長に、パウロを監禁するように命じたが、ある程度の自由を与え、友人たちが世話をすることを許した。

④ペリクスは、パウロの話に興味を持ったようである。

＊パウロは、死者の復活こそ主要なテーマであることを示した。

⑤ペリクスは、何度もパウロから話を聞くことになる。

(2) アウトライン

①パウロから話を聞くペリクスとドルシラ（24 節）

②福音を伝えるパウロ（25 節）

③その後の展開（26～27 節）

結論：

(1) 2 年の意味

(2) パウロの 3 ポイントメッセージと主イエスの教え

ペリクスへの伝道について学ぶ。

I. パウロから話を聞くペリクスとドルシラ（24 節）

1. 24 節

Act 24:24 数日後、ペリクスはユダヤ人である妻ドルシラを連れて来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスを信じる信仰について話を聞いた。

(1) ペリクスと妻ドルシラは、「この道」に興味を示した。

- ①キリスト・イエスを信じる信仰は、「この道」である。
- ②キリスト教という言葉よりも、本質を突いた言葉である。
- ③パウロは近くに幽閉されているので、直接話を聞くためには好都合であった。
- ④彼らは、パウロを呼び出した（これは、正式な裁判ではない）。
- ⑤恐らく妻ドルシラがパウロから話を聞くことを希望したのであろう。

(2) ペリクスの結婚歴

- ①ドルシラは、ペリクスの 3 番目の妻である。
 - *ペリクスは、自らの地位を上げるために結婚を利用した。
- ②3 番目の妻ドルシラは、シリアの小国エメサの王アジザスの妻であった。
 - *ペリクスは、16 歳の彼女を誘惑して離婚させ、自分の妻にした。
 - *ドルシラは、ペリクスと結婚し、この当時 20 歳前後になっていた。

(3) ドルシラの家系

- ①「ユダヤ人である妻ドルシラ」とあるが、厳密にはイドマヤ人である。
 - *イドマヤ人は、イスラエル人とエドム人の混血である。
- ②彼女は、ヘロデ・アグリッパ I 世の末娘である。
 - *マリアンネ、ベルニケ、ドルシラ
- ③彼女は、ヘロデ・アグリッパ II 世の妹である。

(4) ヘロデ家の人々の罪

- ①ドルシラの兄のヘロデ・アグリッパ II 世は、パウロを裁いた（26 章）。
- ②父ヘロデ・アグリッパ I 世は、ヤコブを殺し、ペテロを投獄した（12：1～3）。

Act 12:1 そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、

Act 12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。

Act 12:3 それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であった。

- ③大叔父ヘロデ・アンティパスはバプテスマのヨハネを殺した（マタ 14:10～11）。

Mat 14:10 彼は人をやって、牢の中でヨハネの首をはねさせた。

Mat 14:11 そして、その首は盆に載せて運ばれ、少女に与えられたので、少女はそれを母親のところに持って行った。

- ④曾祖父ヘロデ大王は、ベツレヘムの 2 歳以下の子どもを殺した（マタ 2：16）。

Mat 2:16 その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士

たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。

Ⅱ. 福音を伝えるパウロ（25 節）

1. 25 節

Act 24:25 しかし、パウロが正義と節制とやがて来る審判とを論じたので、ペリクスは恐れを感じ、「今は帰ってよい。おりを見て、また呼び出そう」と言った。

(1) パウロは、3つのことを論じた。

①正義とは、神の義と聖さの水準である。

②節制とは、人の罪の深さである。

＊放縦な生活に関しては、ペリクスとドルシラ夫婦が第一人者である。

＊ペリクスの政治と結婚は、不義に満ちていた。

③やがて来る審判とは、死後の審判のことである。

＊主イエスの血潮によって罪の赦しを得ていなければ、火の池で苦しむ。

(2) ペリクスは、恐れを感じた。

①彼は、神学的議論を期待していたが、道徳的生活がテーマになった。

②パウロの話は力強かったので、彼は大いに恐れた。

＊彼には、罪の自覚が十分にあった。

③しかし、妻のドルシラが恐れたとは書かれていない。

＊ヘロデ家の血が流れている。

(3) しかしペリクスは、信仰の決断を先延ばしにした。

①「今は帰ってよい。おりを見て、また呼び出そう」

②ここで起こっている悲劇を見逃してはならない。

＊邪悪なペリクスに救いの手が差し伸べられた。

＊家系そのものが墮落していたドルシラに救いの手が差し伸べられた。

③彼らは、世界最高峰の説教者を与えられた。

④彼らがいた部屋は、聖なる空間となった。

⑤しかし、彼らが信仰を告白したという証拠はない。

⑥ドルシラは、ベスビオ山の噴火で、ペリクスとの間に生まれた子といっしょに死ぬことになる。

＊まるで火の池での裁きを象徴しているかのような最期である。

(4) 決断を先延ばしにすればするほど、人の心は頑なになる。

①いつでも決心することができると思っはならない。

②2 コリ 6 : 2

2Co 6:2 神は言われます。／「わたしは、恵みの時にあなたに答え、／救いの日にあなたを助けた。」／確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

Ⅲ. その後の展開（26～27 節）

1. 26 節

Act 24:26 それとともに、彼はパウロから金をもらいたい下心があったので、幾度もパウロを呼び出して話し合った。

(1) ペリクスは、何度もパウロを呼び出し、話し合った。

①信じるためではなく、賄賂をもらうためである。

②総督が囚人から賄賂をもらうのは、違法である。

③しかし、このようなことはよく行われていた。

(2) ペリクスは、こう考えた。

①パウロは、異邦人信者からの献金をエルサレムに持って来た。

②彼には、資金を集める力がある。

③彼が声をかければ、友人たちが資金を集めるに違いない。

2. 27 節

Act 24:27 二年たって後、ポルキオ・フェストがペリクスの後任になったが、ペリクスはユダヤ人に恩を売ろうとして、パウロを牢につないだままにしておいた。

(1) 「二年たって後」

①パウロのカイザリヤでの幽閉は、2年に及んだ。

②2年たった時、ローマ本国は、ユダヤ総督ペリクスを罷免した。

＊カイザリヤでユダヤ人と異邦人（主にギリシア人）の紛争が起こった。

＊ペリクスは、多くのユダヤ人たちを虐殺した。

＊カイザリヤのユダヤ人指導者たちは、直訴のためにローマに上った。

③ポルキオ・フェストが後任に任命された。

(2) しかしペリクスは、パウロを幽閉したままにしておいた。

①ユダヤ人に恩を売ろうとした。

②彼は、ユダヤ人からの支持を必要としていた。

結論

1. 2年の意味

(1) クロノスとカイロスの違い（前回のメッセージ参照）

①クロノスは、人間の主観的時である。

②カイロスは、神の時である。

(2) パウロにとってのカイロス

①この2年間は、パウロがローマでデビューするための準備期間となった。

(3) ルカにとってのカイロス

①ルカは、パウロのそばで彼の証言を聞き、初期の教会に関する情報を集めた。

②ルカは、パウロを訪ねて来る信者たちから、種々の証言を聞いた。

③ルカは、ルカの福音書と使徒の働きを書くための資料集めをした。

④ルカの福音書と使徒の働きの前半は、この期間に書かれた可能性が大である。

⑤ルカ 1:1～3

Luk 1:1 と 2 私たちの間ですでに確信されている出来事については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人々が、私たちに伝えたそのとおりを、多くの人が記事にまとめて書き上げようと、すでに試みておりますので、

Luk 1:3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べておりますから、あなたのために、順序を立てて書いて差し上げるのがよいと思います。尊敬するテオピロ殿。

2. パウロの3ポイントメッセージと主イエスの教え

(1) ヨハ 16:8～11

Joh 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。

Joh 16:9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。

Joh 16:10 また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。

Joh 16:11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。

①イエスが去っていかなければ、助け主（聖霊）が弟子たちのところに来ない。

②もし去って行くなら、イエスは助け主（聖霊）を弟子たちのところに遣わす。

③悲しみは、神の視点から見ると、大きな祝福が来る前の準備である。

(2) 助け主（聖霊）の働き

①聖霊は、罪を示す。

*ここで言う罪とは、不信仰の罪である。

*パウロは、節制について論じた。

②聖霊は、義を示す。

*メシアであるイエスは、神の義を達成して父なる神のもとに昇られた。

*私たちは、このイエスを信じることによってのみ、義と認められる。

*パウロは、正義について論じた。

③聖霊は、最後の裁きを示す。

*この世を支配する者（サタン）はすでに裁かれた。

*従って、サタンに従う者はすべて最終的に裁かれる。

*パウロは、やがて来る審判について論じた。

(3) パウロの話の内容は、聖霊の働きに沿ったものであった。

①聖霊は、真理を示す。

②聖霊は、メシアであるイエスの栄光を表わす。